身体から発見する演劇

ジャック・ルコック国際演劇学校一九八一～八三

盛　加代子

翔雲社

はじめに

私はジャック・ルコック国際演劇学校（École Internationale de théâtre Jacques Lecoq）の一九八一～八三年の卒業生である。卒業後も今日まで、演劇創作や演劇教育に携わってきたが、自分が物事を判断する上で、例え演劇以外のプライベートであっても、ある教育法に基づいていると感じる時が多い。自分の劇団を持ち、新しい演劇を探し続けていたヨーロッパでの二〇年間は勿論のこと、帰国して大学教育に携わるようになった今日、以前にも増してそのように感じている。その昔、パリで誰に聞いても分からない小さな演劇学校で、外国人である私が、日本では学ぶことができなかった「自分に真摯に向き合う姿勢」を学んだ学校が、ジャック・ルコック国際演劇学校だ。まるで秘密組織のような、知る人ぞ知る学校である。

この学校の大きな特徴は、学校の宣伝を従来行われている形では一切せず、卒業生の社会的活躍による口コミのみの、昔も、ジャック・ルコックが亡くなって一七年過ぎた今も同じく、世界中から学生がこの演劇学校に集まって来ることにある。毎年三〇人程度の卒

業生が世界に散らばり、その後の彼らの社会的活躍によって学校の存在が知られることが、この学校の唯一の宣伝となる。来る者に劇創作の方法を教え、瞬く間に演劇の虜にする魔法を掛ける学校なのだ。通称 Chez Lecoq（ルコック家（のところ））。本書ではルコック学校とする。

一九九九年一月にジャック・ルコックが亡くなったとき、これで閉校かと誰もが思ったであろう。この学校はジャック・ルコックという一人の天才教師が、独特の教育法を発明し経営していた学校だからだ。しかし、彼の死後も生前と同じように世界中から学生は集まって来て、毎年、卒業生を世界中に輩出し続けている。そして、彼の発明したルコック演劇教育法が、実は、彼無しでも成立することを、彼の死後、卒業生らがその活躍振りから証明してくれているのだ。それはルコック演劇教育法が、時代と共に常に進化し続ける「生きた方法論」として確立されているからだ。世界に類を見ない演劇教育法を、今でも世界中から学生が集まって来るこのパリの小さな学校の魅力を、自分の学生時代の記憶を辿りながら、あらためて分析しようと思った。本書はルコックの死後も世界一の学びの場として存在し続ける、パリの一演劇学校について記したものである。

目　次

はじめに ―― iii

第一章　留学に至るまで

手習いの演劇から発見の演劇へ ―― 2
どんな学校か ―― 5
どこにあるのか ―― 6
入学試験は無いが… ―― 11
授業料は ―― 12
フランスで認められていなかった学校 ―― 13
時間と年間プログラムと講師陣 ―― 17
卒業生の活躍 ―― 24

第二章　一年生　第一学期　入学試験期間

授業初日　一九八一年一〇月一二日　雨 ―― 28
動きの授業（身体教育学、運動分析学、アクロバット） ―― 31
〔日常生活の再演〕　一週目〜四週目 ―― 62
自主授業　一週目〜六週目 ―― 74
〔中性仮面〕　五週目〜一〇週目 ―― 81
自主授業　六週目〜一〇週目 ―― 88
入学試験結果 ―― 96

第三章　一年生　第二学期

第二学期のクラス編成 ―― 100
ルコックの運動分析学　第二学期 ―― 101
〔要素と質〕　一週目〜二週目 ―― 117
自主授業　一週目〜二週目 ―― 121

〔詩と絵画〕　三週目〜四週目 ―― 122
自主授業　三週目〜四週目 ―― 124
〔動物〕　五週目〜六週目 ―― 127
自主授業　五週目〜六週目 ―― 130
〔動物から人へ〕　七週目 ―― 131
自主授業　七週目 ―― 133
〔キャラクター〕　八週目〜一一週目 ―― 134
自主授業　八週目〜一一週目 ―― 141
〔自作仮面〕　一二週目 ―― 145
自主授業　一二週目 ―― 147

第四章　一年生　第三学期　進級試験へ向けて

動きの授業　一週目〜九週目 ―― 158
〔仮面〕　一週目〜三週目 ―― 159
〔音楽〕　四週目〜八週目 ―― 165

進級試験 ―― 172
個人面談 ―― 176

第五章　二年生　プロフェッショナル養成

白塗りのパントマイムと身振り言語 ―― 182
メロドラマと大胆な表現 ―― 187
ギリシャ悲劇、群衆と英雄 ―― 193
ブッフォン、社会性と神秘 ―― 197
クラウン ―― 204
コメディア・デル・アルテ ―― 209
卒業試験 ―― 219

第六章　それぞれの道

何にでも終わりはある
その終わりが見えかけたら次のやるべきことを見つけよ ―― 228
ベルギーで劇団設立 ―― 229
スペインへ拠点を移す ―― 232
帰国、そして現在に至る ―― 233
私が目撃したルコック学校の卒業生たち ―― 234
おわりに ―― 242

第一章　留学に至るまで

手習いの演劇から発見の演劇へ

私は、幼児の頃から人より大きな声が出せて身体も動かすことが出来た。教えられたことを模倣することが不得意ではなかったからだ。周囲の人間がそんな自分の姿に喜ぶのを見て、年を追う毎に人前に出て何かをする機会は増え、いつの間にかそれが自分の特徴と考えるようになっていた。そのうち、できるだけ多く舞台に立つためには何をするべきかと妄想が膨らんでいって、中学に入る頃には、「上京して修行が必要不可欠」という結論に達していた。その頃から親に上京を切願しては困らせた。六年かけて説得した結果、受験させたら諦めるだろうと受験を許して貰った短大（桐朋学園）に合格した時の喜びは一入だった。ところが、桐朋に在籍して三年経って（短大卒業後、専攻科へ進学）も満足出来ないでいる自分がいた。在籍中の四年間には、様々な著名な演出家の授業を受けさせていただいたのだが、どの先生からも共通して、自分には遠すぎる立ち方や話し方を理想としているのが感じられた。しかし、それをどうにかして習得しようと、無理をしている自分が気持ち悪かった。そんな自分が嫌だった。唯一、自分が自立した役者と感じる瞬間を得ることが出来たのが、当時、通称「マイム」と呼ばれた即興演劇の授業であった。誰に

も依存しないで存在できる自分をそこに発見したのだ。自分の感じるまま表現できたものを他人に理解して貰える達成感が、そこにはあった。

この、週に一度の即興演劇の授業を、毎日受講できる環境に身を置きたいと担当講師に胸の中の思いを話したところ、彼も同じ桐朋卒業生であり、私同様にこの授業を受講し、私と同じ思いでパリにある学校に留学したというのだ。つまり、彼も在学中に受講した「マイム」の授業に感動し、卒業後、渡仏したというのだ。それがルコック学校だと知らされたのである。

私は、四歳から学校教育と並行して、学生生活を終えるまで常に、舞踊を通して舞台という場に立ってきた。演劇を学びたいと思うようになったのも、自らの舞踊表現の足しにしたいとの思いからであったが、次第に演劇に魅了され、気が付いた時には、一転して俳優になりたいと思い始めていた。そんな時に、「マイム」の授業に出会い、胸がときめいたのだ。長年の習慣からかどうかは分からないが、身体を使って表現することに心ときめいたのは、己の運命ではないかと思えたのだ。未知なる自分を見つける為に、ルコック学校に留学すると決心したのは、最終学年に達しようとする頃であった。

一九八一年当時の海外留学は、国費留学か裕福な家庭の子供の特権のようなイメージがまだまだ強かったが、私は運が強かった。丁度、実家の商売が軌道に乗っていた頃で、田

舎に暮らす両親に「帰国の暁には、習得した技術で大学の先生になるから」と、根も葉もない嘘で私費留学を承諾させたのだ。

それと、留学したかったのにはもう一つ理由があった。私は頭が固かった。もともと田舎育ちで知識が乏しい上に臆病で人見知り、初めての人と会話をするのが何よりも苦手な上、一度苦手と思い込むと向こうから話しかけられない限り、勝手に内に籠り、人に何かを頼むなどのお願い事はもちろん出来ず、只ひたすら、誰かからの注文や命令を待ち続ける情けないダメ人間だった。そんな自分を恥じ、変えたいと思ってはいたが変えることも出来ず、それでも、どうにかしてこの状態から脱却したいと、もどかしく感じる日々を過ごしていた。私は、自立した大人になり、プロと言われる人になりたかった。性格を変えるのは難しいだろうが、技術として納得出来るものがを得られれば、自分を変えることは可能なのではないか。ひょっとしたら、言葉の通じない外国で、自分を窮地に追い込めば変われるかも知れないと思ったのだ。常に人に左右され易い受け身な自分を、まだ見ぬルコック学校で、フランスのパリで克服出来るかも知れないと希望を抱いた。こうして、自分自身への大きな賭け「人生は一度だけ」と心に決め、捨て身の度胸だけで日本を出発したのだ。

どんな学校か

一九五六年にイタリアから帰国したジャック・ルコックが、俳優教育の場として、独自の方法論――動き、マイム、中性仮面を基礎にしたギリシャ悲劇とコメディア・デル・アルテ――を教えるためにパリに開校し、クラウン、ブッフォンと、新しいジャンルを学生と共に生み出してきた実験室のような学校である。スポーツ選手から舞台の世界に足を踏み入れたジャック・ルコックは、すぐさまコメディア・デル・アルテの発祥地イタリアへ旅立ち、八年後にパドヴァの彫刻家アムレト・サルトリ（Amleto Sartori）の仮面を携えてパリへ戻ったという。彼の発明した方法論が、マイムと無言劇から始まるために、フランス語が苦手な外国人でも受講できることから、開校当初より外国人が入学している。学校の成長と共にクラウン、ブッフォン、メロドラマと、学びのジャンルを増やし続け、一年目は俳優としての精神と肉体形成、二年目は演劇のジャンルを学び、実験に徹する二年制の学校である。卒業生は俳優、演出家、作家、振付家、ダンサー、歌手、美術家、建築家、教育者と多様であり、最大の特徴は世界中から集まって来る学生の国籍が八〇か国を超えていることにある。正に国際演劇学校なのだ。

どこにあるのか

パリ東駅の南側に位置する一〇区、市内でも格安で庶民的な青空市場が週二回立つフォブール・サン・ドニ通り。果物、野菜は勿論のこと、豚の頭から衣類雑貨までなんでもありの庶民的な市場が立つ通りだ。パリの秋は雨が多く、入学前手続きで初登校するこの日も雨上がりで決して晴れてはいなかった。昼過ぎになると、皮が真っ黒に変色し、熟れ過ぎのバナナが山積みにされて安売りが始まる。市場のクライマックスは、いつも黒バナナと決まっている。その通りを地下鉄のストラスブール・サン・ドニ駅から北に向かって三〇〇メートル程進むと、左側に「57」という番号が付いている一メートル幅の狭い通路がある。この一〇メートル程続く狭くて暗い通路を進むと小さな中庭に出る。正面には玄関が見えないくらい植木の花を置いている小さな一軒家があり、その並びに大きな煉瓦の倉庫のような建物が続いて建っている。建物の前の生い茂っている緑に邪魔されて全体像がよくわからないのは、この中庭が小さ過ぎるからだ。良く見ると、この建物の右手に『CENTRAL』と書かれた小振りの看板が掛かっている扉が見える。押しても引いても開く木製のバネ付き扉だ。ここは、かつてパリ市民が観戦に通った、市内唯一のボクシン

グ会場であったらしい。そのようなことが、日本へ送られてきた学校案内の中に書かれてあったのを思い出した。扉の軋む音を後手に中に入ると、古いのやら新しいのやら、多分卒業生の劇団が宣伝用に持って来た上演ポスターが、べたべたと貼られている壁が左へとずっと続く。この長い廊下のところどころに置かれている木製の長椅子は、ひとつとして同じ型のものがない。一個ずつ買って置いていったかのように。その廊下の行き止まりには小さな踊り場があり、そこに分厚く大きな木製の机がドンと置かれていて、机の上には卓上ランプと数本のペンがのっている革のペン皿、インク吸取器が置かれている。秘書であろうか、黒髪のフランス人らしき中年女性が、椅子から立ちあがって迎えてくれた。この、窓口も事務所らしき部屋も無い、廊下の突き当りにある小さな踊り場の机が、パリのルコック学校の受付である。

昼間から点灯されている卓上ランプの明かりは、パリの秋の曇り空に似合っている。特別愛想が良いわけでもない秘書は、「フランス語？　英語？」と、私に声をかける。一〇月上旬に来る見知らぬ外国人は新入生と決まっているので、無駄な言葉は発しない。だから、私の片言のフランス語でも入学手続きは出来る。自分の名前と国籍さえ言えれば、引き出しのファイルから書類を出して確認してくれる。幸い、私以外は誰もいないので、付きっ切りで相手をしてくれそうだ。どうやら、日本から送った書類は届いているようだ。

「カヨコ、希望のクラスは？　午前？　午後？　夜？」早速、下の名前で呼ばれて戸惑う。私は午前中のクラスを選んだ。午前中のクラスは人数が割と少なく、同じ午前中に二年生のクラスがあるので、ひょっとしたら授業を覗けるかも知れないお得なクラスらしい。その上、午後にアルバイトを入れることも可能だ。言葉も話せない私に、この先どうやってアルバイトが出来るのか、誰が雇ってくれるのかと一瞬頭を過ったが、今は気にしない。でも、本当は一週間前に銀行口座を作ろうと、当時パリ市内に唯一ある日本の銀行へ出向いた際、そこで偶然出遭った大橋也寸（やす）に教えられたのだ。彼女はルコック学校の日本人最初の卒業生であり、ルコック教育法を日本へ初めて紹介し、多くの日本の俳優たちをルコック教育法の虜にした女性演出家の大橋也寸だ。この時期（一九八〇～八四）、彼女はパリで暮らし、母校であるルコック学校で教鞭をとっていた。彼女が桐朋の元助教授だったことはよく知られた話だったので、私でも桐朋在学中から名前と顔だけは知っていた。その上、彼女に纏わる山のような逸話は伝説のように先輩方から聞かされていて、在学中からずっとお会いしたいと思っていた人だった。まさかルコック学校で教鞭をとっていたとは夢にも思わず、彼女に近寄り、自ら自己紹介したのだ。二度と帰らぬ覚悟で国を出たつもりだったので、いつもの初対面の人に抱く恐怖感にも勝てたのだ。肝が座っていた私は、その時、彼女からクラス選択のアドバイスまで聞き出していた。

秘書から「学校内を見たかったら案内してあげる」らしきことを言われ、この小さな踊り場の左奥にある扉を押して中に入れて貰うと、更に廊下が奥へ続いていた。この学校は表通りからどれだけ奥深いのか。廊下を挟んで左手に小ホールと呼ばれる青のリノリウムが張られた稽古場があり、右手にはトイレとシャワー付きの男女別の更衣室、正面には大ホールに続く大きな踊り場がある。この踊り場は細い柱数本で支えられていて、元ボクシング会場のエントランスであったことが分かる。エントランスの壁一面に、かつてのスターボクサー達のポスターやトロフィーが飾られていたのであろう備え付けられたショーケースが、空っぽのまま蛍光灯に照らされて並んでいる。一連のショーケースの下の片隅に、すっかり擦り切れた皮張りの巨大なソファが一個だけ置かれている。このソファは学生にとって唯一の安らぎの場で、時には一度に一〇人近い人間が乗る代物だ。なんといっても、学校のソファはこれしかない。乗り損ねた学生は冷たい床に座り込むしかない。

このエントランスは学生の集う場でもある。エントランスの端には二階へ続く階段がある。天窓の付いている大ホールをぐるりと囲むギャラリーへ直行できる階段でもある。二階にはギャラリーの他に学長室、教授室、校長室があり、また更にその上の階には屋根裏部屋もあるらしいのだが、私は第一学期末まで階段を上ったことはなかったし、また、その後も入室したのは校長室までで、二年間も通った割には未だに、その詳しい構造を知ら

ない。やはり、根っからの臆病者なのである。

一階のエントランスの床は、大ホールの入り口まで緩い傾斜で下がっている。昔の映画館で見かけた木製のバネ付き蛇腹式の扉で入り口を全開にすることが出来る。大ホールの床は綺麗に白木で板張りされて、小ホール同様、土足厳禁だ。バレエシューズのように底の柔らかい上履きが必要である事も、日本に送られて来た学校案内には書かれていた。ルコックは「日本じゃないけど、ここでは日本人のように靴を脱ぐのさ」と嬉しそうに茶目っ気たっぷりに毎回学生に言ったものだ。天井の高さは一五メートルもあるのだろうか、美しい太い木の梁が何本も組まれ、天窓から陽が入ると、一見礼拝堂のようにも見える大空間だ。正面の壁からホールの四分の一の所に臙脂色の緞帳が垂らされ、緞帳の後ろを舞台として使っているのが分かる。しかし、剥き出しの三方の壁には、かつてボクシングリングを四方から囲んでいた客席段を固定していた跡が作った壁の凹みがあちらこちらに残されたままだ。床から二メートル上までしか塗られていない藍色のペンキは、残ったむき出しの壁をいっそう強調して、かつてのボクシング会場の名残を隠そうとしていないのが分かる。一九世紀末に建てられた体育館を愛おしみ、敢えて完璧にリフォームせず、この未完成の場所で新たな演劇のスタイルが生まれるよう願いを込めたのだそうだ。古き良き時代と共に暮らすヨーロッパ人らしさがここにも感じられる。決して、全てをリフォーム

しないのだ。

CENTRAL と呼ばれるこの場所は、表通りから軽く二〇メートル以上は奥に位置し、パリ市内の騒音など一切感じさせない絶好の稽古場である。ルコック学校が現在も尚健在なのは、この立地条件の良さも要因のひとつであることは間違いない。

入学試験は無いが…

ルコック学校には入学試験が無い。入学金の小切手を添えて書類で申し込み、定員に達すれば締め切られる。学歴も関係ない。年齢が二一歳以上なら良いのだ。但し、学校は三学期制で、最初の一学期を入学試験期間と定めている。入学手続きを終えた誰もが一〇月から一二月までの授業は受講できるが、合格できなければ第二学期には残れない。当然、入学時に支払う授業料は一学期分だけである。そして、もう一つの条件は、フランス語の日常会話ができることだ。しかし、書類手続きの時点では「これから勉強します」で、受け入れて貰える。

私は、フランス語文法の現在形を学び、これから過去形をという時点で渡仏し、パリで二か月間語学学校へ通って対処しようとしたが、授業でのフランス語には全く太刀打ちできなかった。それでも片言のまま過ごし、一年後の夏にソルボンヌ大学の夏期集中講義に入り直して、やっとどうにか文法が理解できるようになった。

授業料は

当時のフランスの教育費は、公立でも私立でも無料が当たり前で、芸術関係の専門学校であっても、大抵の学校は国からの巨額な助成金を得て、授業料は入学金を支払えばフランス人であれば殆ど無料であった。ところがルコック学校の授業料は、桁外れに高額（一学期が二〇万円程度）であった。この学校は国の助成金を一切受けずに、完全な個人経営の学校であるため、学校の家賃、光熱費、維持費、事務費、各教授や職員の給料など全て、学生の学費だけで賄われている。

ルコックが国の助成金を申請しない理由は、自分の学校を国や教育機関、スポンサーの

誰からもなんの制約も受けずに、自分の思うままの方法「科目、時間割、人数、国籍、教授陣」で経営することにある。また、高額な学校であることが、入学して来る学生の覚悟にも繋がると信じているのだ。覚悟のある学生と実りある実験を続けるために、完全個人経営を選択し、現在も尚同じ方法で学校は運営されている。また、それを可能にしているフランスでも極めて稀な、本当に珍しい学校なのである。

フランスで認められていなかった学校

当時のフランスは、ルコック学校を公の教育機関と認めておらず、おかげで私はフランス大使館から学生ビザを手に入れるために、パリのアリアンセ・フランセーズ語学学校に同時入学しなければならなかった。長期滞在ビザを取得するためには、国に認可された教育機関に所属していなければならないからだ。ところが、北欧の同級生たちは国費留学生だった。つまり、フランスが自国の教育機関と認めない学校を、他国の北欧は教育機関として先に認めていたということなのだ。北欧諸国は、どの国よりも先見の明があったのだ

なと今更ながら思う。現在は日本からでも、ルコック学校留学で学生ビザが取得できるらしい。

当時のフランス人たちは全員、口を揃えて、ルコック学校の授業料は非常識な位に高額で、フェイ・ルコック学校長は金の亡者だと口を尖らせてよく議論していた。フェイも卒業生であり、学校長で、ルコック夫人である。教育面はジャック・ルコックが、財政面はフェイ・ルコックと、学校の責任を二分していた。

にもかかわらず、高額な授業料を払ってフランスのパリまでルコック教育法の魅力を習得するために、毎年世界中から学生が集まって来ている。フランスよりも経済状況が悪い国の学生も沢山いたが、やはり裕福な学生が多かった。世界中から集まってきた学生らは卒業後に自国に戻り、彼の教育法を紹介する。すると、それを受けた学生がまたルコックの下に集まって来る。当時、授業料が法外だと真っ先に愚痴を言うフランス人でさえ、新入生一五〇人中、三〇人くらいはいた。最近は、新入生の受け入れ数は変わらないのに、フランス人が六〇人～七〇人近く入学して来るらしい。授業料は毎年、消費税と比例して上昇し、相変わらず高額の筈なのに、フランス人が何故二倍にも膨れ上がったのだろうか。

それは一九九九年一月一九日にルコックが亡くなったことによって、私たちの予想を覆してフランスでの学校の評価が大きく変わったからである。

フランスを代表する太陽劇団（Le Théâtre du Soleil）の代表であり演出家のアリアンヌ・ムヌーシュキン（Ariane Mnouchkine）が卒業生だったことを、ルコックの死後、公にしたからだ。また、現在は解散して個別に活躍しているが、元コンテンポラリーダンスカンパニー・レスキス（L'Esquisse）で、フランスのアンジェにある国立コンテンポラリーダンスセンターの代表をしていたジョエル・ボウビエ（Joëlle Bouvier）とレジス・オバディア（Régis Obadia）や、パリを拠点にインターナショナルチームを組んで世界ツアーをする、俳優なら誰でも一生に一度は彼の演出を受けてみたいと思う演出家のピーター・ブルックが、近年、ルコック学校の卒業生を協力者や俳優として選んでいることも、フランスでの評価が変わった原因である。そして、既に三五年以上も世界中で演劇ワークショップを続けている、日本でもお馴染みのモニカ・パニュウ（Monika Pagneux）やフィリップ・ゴーリエ（Philippe Goulier）を始め、ルコック自身が公言していた最高の弟子ピエール・ビラン（Pierre Byland）の長年の功績によって国外からのルコック学校の評判がフランスに届いて来たせいでもある。

しかし、どんなにフランス人の入学者が増えたとしても、毎年の入学受け入れ人数と卒業人数は変わらない。最も変わらないのが、卒業生は当時も現在も四分の三以上は外国人留学生であるということだ。その大半はフランスを取り巻くヨーロッパ諸国人が占め、内

訳のトップが英国人、その後に次ぐスイス人、そしてドイツ、スペイン、イタリア、スウェーデンと続く。ヨーロッパ圏以外では、やはりアメリカ合衆国が断然トップで、次いでカナダ、オーストラリア、ブラジル。地域別にみると、ヨーロッパ圏出身を筆頭に、北アメリカ、次いで南アメリカと中央アメリカから成るラテンアメリカ、続いてオセアニア

◇表 1-1　ジャック・ルコック国際演劇学校　国別入学者内訳（2006 年）（単位：人）

	国名	人数
1	フランス	1,541
2	イギリス	483
3	アメリカ合衆国	454
4	スイス	282
5	カナダ	191
6	スペイン	174
7	イタリア	145
8	スウェーデン	142
9	オーストラリア	89
10	ノルウェー	78
11	デンマーク	57
12	イスラエル	56
13	ベルギー	55
14	ブラジル	49
15	日本	46
16	オーストリア	42
17	オランダ	41
18	ギリシャ	34
19	メキシコ	31
20	南アフリカ	27
21	ポルトガル	24
22	韓国	22
23	コロンビア	21
24	ベネズエラ	20
25	チリ	13
26	フィンランド	12
27	ニュージーランド	
28	チュニジア	
29	ウルグアイ	11
30	旧ユーゴスラビア	
31	アイスランド	7
32	中国	
33	レバノン	
34	トルコ	6
35	ガボン	
36	ペルー	
37	ルーマニア	
38	スロベニア	
39	イラン	5

	国名	人数
40	ポーランド	5
41	モロッコ	
42	ハンガリー	4
43	コスタリカ	
44	台湾	
45	インド	3
46	ブルガリア	
47	ルワンダ	
48	セルビア	2
49	チェコスロバキア	
50	シンガポール	
51	エクアドル	
52	コートジボワール	
53	ロシア	
54	カンボジア	
55	ブルキナファソ	
56	ニューカレドニア	
57	アルバニア	
58	リヒテンシュタイン	
59	アルジェリア	1
60	クルジスタン	
61	リビア	
62	リトアニア	
63	マケドニア	
64	リュクセンブルグ	
65	ベニン	
66	ウズベキスタン	
67	パナマ	
68	クロアチア	
69	エジプト	
70	タイ	
71	香港	
72	イラク	
73	トーゴ	
74	ケニア	
75	ベトナム	
76	ザイール	
77	ジンバブエ	
78	スロバキア	

出典：École International de Théâtre Jacques Lecoq, *École internationale de théâtre Jacques Lecoq 1956-2006*, DHC/ART fondation pour l'art conntemporain,ideal productions,pp.27 ～ 28、2006 年。
加筆修正し、筆者作成。

アジア、中東、アフリカの順だ。アジアからは日本人の入学者が一番多い（表1‐1参照）。これは最初の日本人卒業生である大橋也寸が帰国後、劇団や演劇学校で数多くの実験を重ねた影響が大きい。また、最初の韓国人卒業生ヨオ・ジンウー（Yoo Jin Woo）は、六年間のルコック学校での講師を経て、現在、ソウルで教鞭をとっている。彼の教え子がルコック学校に入学して来るのも時間の問題であろう。最近、経済成長が著しい中国からも最初の卒業生が出たと聞いた。

時間と年間プログラムと講師陣

毎日一時間の動きの授業と一時間半の即興の授業、そして、一時間半の自主授業の三科目、合わせて一日四時間、週五日で構成されている。二年生が午前中に一クラスだけあり、一年生は午前中にAクラスと午後にBとCクラス、夜にDクラスの四クラスある。このDクラスは、六月の下旬で次年度の入学希望者受付を一旦締め切るが、九月になっても希望者は止まらない。その、遅れて申し込む人達がDクラスに入れられるのだという。それで

も、希望者が止まらない時は、その次の年に回されるのだ。

また、その他に年齢制限に達しない若い人達のための入門クラスが週に二回あり、第一学期中は六クラス全てが、二つしかない稽古場を隙間なく使っていることになる（表1‐2参照）。教授陣も第一学期は大忙しだ。

授業はテーマ毎に分かれていて、テーマに沿った即興、動き、作品創作が展開されるようプログラムされている。テーマに費やされる期間は決められておらず、学生の習得度に合わせて自由に変えられるように流動的だ。時には予定されているテーマが無くなったり、新しいテーマが現れたりもする。

<table>
<tr><td colspan="2">クラス</td><td>9：00 ～ 13：00</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td colspan="2">２年生</td><td>週四回(月～金)</td><td colspan="3">校舎使用禁止</td></tr>
<tr><td rowspan="8">１年生</td><td>A</td><td>週四回(月～金)</td><td colspan="3">校舎使用禁止</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>14：00 ～ 18：00</td><td></td></tr>
<tr><td>B</td><td>校舎使用禁止</td><td>週四回(月～金)</td><td>校舎使用禁止</td></tr>
<tr><td>C</td><td>校舎使用禁止</td><td>週四回(月～金)</td><td>校舎使用禁止</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td><td>17：00 ～ 21：00</td></tr>
<tr><td>D</td><td colspan="2">校舎使用禁止</td><td>週四回(月～金)</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3"></td><td>18：30 ～ 21：00</td></tr>
<tr><td colspan="2">ＬＥＭ</td><td colspan="2">校舎使用禁止</td><td>週二回
(火曜日と木曜日)</td></tr>
<tr><td colspan="2">入門
クラス</td><td colspan="2">校舎使用禁止</td><td>週二回
(火曜日と木曜日)</td></tr>
</table>

◇表 1-2　ジャック・ルコック国際演劇学校　　授業形態（1981 ～ 82）　筆者作成
※各クラス共に校舎のクラス時間外の使用は堅く禁じられていた。

一年生の第一学期の終わりに、ルコックとの個人面談が一対一である。四クラスある中、夜のクラスを無くすために選抜が行われるのだ。私たちの年は入学者が多かったので、一年生を一クラス三〇名で三クラスにするために六〇名近くが辞めさせられた。

第二学期から第三学期への試験は無く、第三学期に進級試験として出されたテーマに向け、一か月以上取り組む。学年末試験は、個人発表する動きの試験とグループで作る作品発表が、五月下旬から六月に掛け一〇日間も続く。そして、この最後のグループ発表が、一年生に唯一許される一般公開上演会になる。全ての試験が終わった後に、再びルコックと一対一の個人面談で、二年生に進級出来るかどうかを宣告されるのだ。二年生に残れるのはわずか三〇名。この三〇名で一年契約の劇団を作るつもりで、創作訓練が続く。一つのジャンルで創作を終えると、一般公開発表を行うかどうかを自分たちで決めさせられる。ルコックの評価を踏まえるわけだが、全て自分たちで決断する。一般公開が多い年も少ない年もある。そして最後には、卒業制作として自作自演の作品をルコックの前で発表する。最後の発表は〔注文〕と呼ばれ、同時に一般公開される。その批評会の後、最後の個人面談をルコックとする。時には卒業制作の出来が悪く、卒業証書を貰えなかった学生もいた。

動きの授業は、身体教育学と運動分析学が週に二回ずつあり、それにアクロバットの授業が一回加わり、一時間ずつ毎日行われる。

身体教育学とは、一人の教授が週に二回担当し、ティラピスマットを使い、自身の体の仕組みを部位毎に動かしながら少しずつ理解を進め、自分で自分の体を認識し、支配できるようになる大切な授業だ。この授業は、初期の卒業生で、長年、ルコックの協力者として教授を務め、日本にも何度か来日したお馴染みのモニカ・パニュウが生み出した授業である。彼女はドイツ表現主義舞踊を学んだ後、ルコックに学び、フェルデンクライス身体訓練法の影響を受けながら、独自の俳優の為の運動教育学を確立させ、多くの俳優やダンサー、演劇教育者の教育に徹して来た女性で、一九六五年〜七九年までルコック学校が大きく成長していく時期を共に経た後、独立した。彼女の抜けたあとを指名されたのが、彼女の生徒でもあり卒業生のユーゴスラビア人のサンドラ・ムラデノヴィッチ（Sandra Mladenovitch）で、この授業を引き継いで担当した。

運動分析学は、勿論、その考案者であるジャック・ルコック自身が週に一回、卒業生で現役俳優のポルトガル人、エドアルド・ガロス（Edouardo Galhos）が週に一回担当した。主にルコックが発明した「二〇種の体操」を中心に、即興テーマに準じながら、時には俳優の肉体形成の訓練として、様々に変化する人間の動きを多方面から分析して教える授業である。エドアルドは、私が在籍した一年生を最後に、一九八二年に退職している。彼が学校で一〇年間教えた最後の年でもあった。彼は、私にルコック学校を紹介して下さった

岩浅豊明と同級生だった。

アクロバットは、フランス人で、前年度（一九八一年）に卒業したばかりのクリストフ・マルシャル（Christophe Marchand）が担当した。それまで、学校の講師には三年生という教育課程を終えた卒業生がなると決まっていたのだが、ルコックがクリストフの動きに惚れ、卒業と同時に即スカウトした前代未聞の出来事だと噂されていた。クリストフの動きは羽が生えたように軽く、それでいてバネがあり、美しい体操をする俳優のものであった。また、その温厚な性格から、皆から慕われる存在でもあり、ルコックの死後も一〇年以上、学校で教え続けた。

一時間半の即興の授業は、ルコックを含め四人の教授が日替わりで教える。ひとつのテーマの下に四人の講師が別々の課題を教える。つまり、毎日別の先生からそれぞれのテーマで即興授業は進むのだ。講師陣の顔ぶれは、ルコックを筆頭に、前記のエドアルド、チュニジア人のラサード・サイディ（Lassaad Saidi）、フランス人のジャック・ゲッチ（Jacques Guedj）の四人だ。ラサードは一九八五年まで一〇年間学校で教授し、その後は自分の名前の学校をベルギーの首都ブリュッセルに開校した、現在もバリバリの現役である。彼は我々の卒業後に、メロマイムとキャバレーブッフォンという新しい方法論を学校に残して退職している。ジャック・ゲッチは私の卒業の年一九八三年まで五年間教授し、

その後は自身の劇団活動に専念している。ジャック・ゲッチはルコックと同じ名前なので、区別するためにジャゲッチと苗字をくっつけて呼ばれていた。

第一学期の即興テーマは、「日常生活の再演」と「中性仮面」。「日常生活の再演」は四週間掛けて、「中性仮面」には六週間掛ける。「中性仮面」はルコック学校の代名詞でもあり、当時も「中性仮面」の授業さえ受けたなら、それだけでパリまで来た甲斐があると誰もが考えていた。

自主授業は毎日ある。この自主授業とは、即興テーマと関連して進行し、学生が自主的にグループを作ってルコックから出されるテーマで、一〇分程度の短い劇を自分たちだけで創作するのである。大抵の場合、一週間の稽古で完成させなければならない。発表のある木曜日の三限までに完成させるのだ。発表の後には必ずルコックの批評があり、他の講師が来ている場合には、彼らからも批評が聞ける。ルコックの批評は、いつも他の誰の批評より正直で、厳しい。その厳しい批評会後、次週のテーマが即座に発表される。大抵の場合、その場で即座にグループが編成されてしまうので、一緒にやりたい人のところへ走るしかない。走らなければ一人取り残される。次の日の金曜日の自主授業には早速新しいテーマの下、新しいグループで創作が始まる仕掛けになっている。また、校舎の使用は授業時間のみで、残って稽古をすることは禁止されている。稽古場がないからである。朝九

時から二一時まで授業がひっきりなしに行われているため、空いているエントランスとか廊下で打ち合わせていると邪魔にされる。出来るだけ授業内で完成させるのが条件だ。こうやって第一学期中に七作品は創作することになるのだ。入学試験とされている最初の一学期中に七回、ルコックに認めて貰えるチャンスがあるのだが、それは同時に七回しか見て貰えないということでもある。しかし、自主授業の一時間半を週四回使って一〇分程度の短編を毎週完成させるのは容易なことではない。特にフランスに来たばかりの学生にとって、この学校の共通語であるフランス語でコミュニケーションをとるのはヨーロッパ人にも至難の業である。コミュニケーション方法は人の数ほど多様にあり、時にはお互いにコミュニケートが出来ず作品が作れない場合も出てくる。そんな時、ルコックは特に厳しい。母国語が違う者同士でコミュニケーション方法を編み出すのが、この自主授業の最初の課題でもあるからだ。第一学期中は如何にして其々とコミュニケートするかを学ばなければならない。これだけは当時の私にも直ぐ分かったことだ。

卒業生の活躍

この学校の宣伝源である卒業生のことは、誰からも一番に興味を持たれることだ。学校にとって卒業生の活躍が一番の結果になる。今や、自国や他国で演劇学校を経営している卒業生、また、大学や専門学校などの教育機関で教授をしている卒業生は数知れない。その中で最も有名なのがフィリップ・ゴーリエだ。彼の授業はその強烈なキャラクターで行われる芝居そのものであり、授業を受けることが彼の芝居の中に存在するかのようで、現在も世界中に生徒を増やし続けている。また、パリ国立劇場で仕事を多くした、二〇一五年に亡くなったスイス人演出家リュック・ボンディ（Luc Bondy）や、カフカの『変身』で有名な英国人映画俳優スティーヴン・バーコフ（Steven Berkoff）、最近では、オーストラリア人映画俳優ジェフリー・ロイ・ラッシュ（Geoffrey Roy Rush）も自ら卒業生だと告白している。また、トニー賞を受賞したブロードウェイミュージカル『ライオンキング』の演出をした映画監督、ジュリー・テイモア（Julie Taymor）もいる。無名で小さなルコック学校の知名度が上がれば上がるほど、卒業生の存在も明るみに出てくるようだ。そして、それら卒業生の活躍と共にルコックの教育法は益々世界に知れ渡っていくのである。

私が在籍していた一九八一～八三年やその前後の一九八〇年代は、ルコックが六〇歳を超えて円熟期に入っていた。彼の教育法が安定期に入り、丁度、その頃の卒業生たちが今一番活躍し注目されている。日本にもここ数年続けて来日している英国の劇団「シアター・コンプリシテ」(Théâtre Complicite) の演出家兼俳優のサイモン・マックバーニー(Simon McBurney) やマルチェロ・マグニ (Marcello Magni) は、私が一年生だった時の二年生で、彼らの稽古風景や発表は今も鮮明に覚えている。また、同じくシアター・コンプリシテのメンバーであり、俳優・演出家・作家であり、現役のルコック学校の教授でもありと多方面で活躍しているジョス・ハウベン(Jos Hauben)や、シアター・コンプリシテの元メンバーで、現在はパリを中心に西ヨーロッパで仕事をしているフリーの演出家リロ・バウ (Lilo Baur) は、私の同級生だ。彼らはピーター・ブルックの第二世代の協力者であり、ピーター・ブルックの口から「ルコック演劇学校が世界一」と言わせた張本人たちでもある。また、世界ツアーを行っているイギリスの国立オペラチームの演出家レア・ハウスマン(Lear A Hausman)とベルギーの国立オペラチームの演出家ルック・ドゥウィット(Luc Dewit) も同じく同級生で、オペラ界での活躍が目覚ましい。二〇一〇年に思想・芸術部門で京都賞を受賞した現代美術家で、映画監督、演劇・オペラ演出家と多彩に仕事をこなす南アフリカのウィリアム・ケントリッチ (William Kentridge) とは、一年間同級生として、

特に抽象課題の時は殆ど一緒に創った。日本で知られている卒業生だけでもこんなにいるのだ。

第二章　一年生　第一学期　入学試験期間

授業初日　一九八一年　一〇月一二日　雨

一九八一年一〇月一二日月曜日朝九時、私はその日初めて、ルコックに会った。ルコックは、朝のクラスの三四人の名前と出身国と顔を覚えるために、大ホール前のエントランスに長椅子で円陣を組ませた。全員に自己紹介をさせる。ルコックはフランス語しか話さない。入学条件にフランス語会話を習得する事は必要条件としてしっかり記載されている。現在形しか習わずに来てしまった私は、理解している風を装う。ルコック夫人が今日だけは英語の通訳をしてくれるという。助かったと喜んだのもつかの間、彼女のアクセントの強いイギリス英語というものを聞いたことが無かった私には全く役に立たなかった。当時、ルコックは六三歳で、身長は一八〇センチくらいだっただろうか、フランスの漫画家サンペ（SEMPÉ）の画に出てきそうな、正面よりも横からの姿の方が印象的な中年太りの普通のおじさんであった。大抵上下お揃いのジャージを着ていて、三人称で話すのが常だ。授業中も勿論だが、面と向かって二人称で話すときは特別な時、例えば、学期末の面接の時とかだけである。

誰かが長々と自己紹介を始めると、ルコックは鼻をモソモソさせて、その大きなお腹を

揺らし「もう十分。次へ行こう。そう、次は彼。」と、その隣の学生を促す。話を切られた学生は目を丸くして驚く。勿論、それを見ている我々も驚く。必要な事だけ話させ、聞きたくない、と説明なしで教えているかのように、感じが悪い。でも、おかげで私も一言で済んだ。名前と国籍だけ。この三〇分間の短い自己紹介の時間を終えると即刻、次に控えている動きの講師が登場し、我々を大ホールへと促す。説明もなく授業が始まるのだから、この先何が起こるのか誰一人分からない、という事だけはみんなの目を見て分かった。全身真っ赤なタイツで登場した講師は、マイムの動きを七種類、次から次へと説明もなく真似しろと言わんばかりに動く。動きの時間は、きっかり一時間で終わる。第一日目は即興の授業の代わりに自習授業が二コマ続いた。ルコックが何か長々と説明していたが、全く分からない。グループを作れと言っているのだけが分かったと思ったら、いつの間にか姿を消していた。一気に緊張が緩みバラバラになる。しかし、これから共に創作する自主授業のグループを見つけなければならないのである。私は自主授業が一体何か、またその課題が何かも全く分からないまま、誘われるままに、一つのグループに入った。フランス語が堪能なアメリカ人を中心に、フランス人とスイス人のフランス語で会話するグループだ。何が何だか全く分からないが、芝居を作らなければならないことだけは理解できた。他のどこのグループからも英語が耳に入って来る。が、しばらくすると皆が皆、英語

をしゃべっているのではない事が分かり始める。あちらこちらで英語が飛び交っている中、私と同じように何がどうなっているのかも分からず、只ニヤニヤしている者、片言のフランス語でこっそり隣の人に質問している者、質問された意味が分からず困っている者、外国人の話す訛りの強いフランス語に笑いをこらえている者、多くが二〇代前半だが、三〇歳以上、いやどう見ても四〇歳くらいの者もいる。もう一つの入学条件に、年齢が二一歳以上となっていることからも、皆何らかの人生経験を持っていそうである。国籍も年齢も態度も、あまりの多種多様さに圧倒され、ここは本当にインターナショナルスクールなのだとあらためて納得する。

私の入学した一九八一年度生は、殆どがヨーロッパ人であり、白人だった。同じAクラス内だけでも、フランス、スイス、オーストリア、オランダ、ドイツ、イギリス、イタリア、ポルトガル、スペイン、ベルギー、スウェーデン、フィンランド、メキシコ、ブラジル、アメリカ合衆国、南アフリカ、アルゼンチン、イスラエル、そして日本人である私。全部で三四人のクラスに一九の国籍が集まっていた。

動きの授業（身体教育学、運動分析学、アクロバット）

この学校の大きな特徴は、独特の身体訓練だ（次頁の表2‐1参照）。運動分析学でルコックが教える動きは、全て明確に理由付けされ説明される。望んで取り組みさえすれば、確実に彼の技術を学び取ることが出来る、最も魅力的な授業である。

また身体教育学は、自分の身体の部位を自分の意志で自由に動かせるようになるために、小さな動きを執拗に繰り返し、自分の体の小さな変化に敏感になる訓練を続ける。それによって、自分の身体の中心を見つけ、理想のバランスを身に着ける授業である。

当時の学校名は今と違って、『École de mime, movement, théâtre Jacques Lecoq―マイムと動きと演劇のジャック・ルコック学校』と命名されていた為に、パントマイムの学校とよく間違われた。同級生の中にミネソタ出身のアメリカ人が一人いたが、入学二か月目にして、ようやくルコック学校がパントマイムの学校ではないと気付き、近くにあったエチエンヌ・ドゥクルー（Étienne Decroux）のパントマイム学校へあわてて転校した者がいた。彼は、ミネソタのパントマイム学校からの奨学金で留学していたらしい。

確かに、パントマイムは学校の授業に組み込まれ、二年生になると重要な学びのジャン

ルでもある。しかし、パントマイムは、俳優の持つべき技術の一つでしかないのだ。ルコックは確かな動きの分析の下にマイム（ジェスチャー）を覚えさせ、不必要な動きを削ぎ取り、目的ある動きだけを教える。身体教育学での動きの柔軟性を追求するのも、自分の身体を自分で自由に支配するためなのだ。身体の美しさを見せるパントマイムという技術を学ぶ事とは別物なのだ。また、ルコック学校で探している演劇は常に進化し、新しい演劇を発見することが学校の目的なのである。

私にとって、目に映る人間のあらゆる動きを事細かく分析したり、それを模倣する訓練を繰り返したり、それらの動きの理由を解明する作業は実に楽しく感じられた。師に「ほらほら、日本人が西洋人から東洋的な動きを習って感動

曜日	9：00 ～ 10：00	10：00 ～ 11：30	11：30 ～ 13：00
月	運動分析学（Edouardo）	自主授業	即興（Lecoq）
火	身体教育学（Sandra）	即興（Edouardo）	自主授業
水	自主授業	アクロバット（Christophe）	即興（Lassaad）
木	運動分析学（Lecoq）	自主授業	自主授業発表批評会
金	身体教育学（sandra）	自主授業	即興（JacuqesGuedj）

◇表 2-1　Aクラスの第一学期の時間割（1981 ～ 82）　筆者作成
※（　）内は担当教授名。

している」と、からかわれるくらい毎日が新しい発見であった。彼の教える様々な種類の肉体労働者の動きは、東洋の武術の動きと共通しているところが多く、自分の元来持っている東洋的な動きを自覚できるようになったのも、この頃からであった。

第二学期に入り、「明かり」「色」「言葉」のテーマで動きを探す授業では特に興奮した。抽象的テーマは私を夢中にした。自習授業でのグループ創作についていけないときも、この肉体作りの授業は私にとって喜びであり、希望でもあった。私はこの運動分析学と身体教育学を学んだ二年間で、自分の体を再発見し、運動機能を理解する喜びを知った。実際に私の運動能力はその後も上昇する一方で、出産する三四歳まで上昇し続けたのである。具体的には、五〇メートル走が三秒も早くなったのである。

◆a　二〇種の動き

ルコックは人間の普段の動きを分析して、パントマイムやコメディア・デル・アルテの動き、スポーツの動きを交えた沢山の動き（体操）を発掘、発明した。その中から二〇種類の運動を習得するのが一年生の課題だ。また、この二〇種類の動きを学年末の進級試験の課題として、数珠繋ぎに組み立てて演じなければならない。よって、どの動きも完璧に

習得する必要がある。

入学初日にエドアルドが教えた体操が、この「二〇種の動き」の一部だということは、授業が進む上で分かっていく。一年かけて丁寧に教えられる動きである。

◇図 2-1　20 種の動きのデッサン　①〜⑨
筆者作成

①**波**とは、体を波のように足元から頭へとうねらせる動きを指す。

先ず、足を肩幅に広げ、まっすぐに立つ。次に両膝を前方に大きく曲げ、上半身を重力に従って脱力する。これを❶とする。

次に、その膝の位置を変えずに膝から上を、腰を中心に起き上がり腰を前方に突き出す。これを❷とする。

次は、前に突き出した腰の上に、胸を乗せるかのように上体を乗せ同時に膝を伸ばす。ここまでは、顎は常に手前に引いた状態だ。これが❸だ。

最後に、引いている顎を胸の前に突き出し、重心を前方に移してバランスをとる。これが❹だ。

そこから膝を伸ばしたまま、顎を最大限に身体から遠い位置のまま九〇度（背中が床と並行になるまで）まで下げ、❶の動きに繋げる。

この動きを繰り返すことによって、体を波打たせることが出来る。

❶を「膝」、❷を「腰」、❸を「胸」、❹を「頭」と呼び、四つのポジションそれぞれの場所で止めて、周囲を見渡してみたり、その形のままゆっくり歩いたり速く歩いたりしながら、その格好から何を（誰を）連想させるか試す。❶の位置では腰の悪い老人を、

❷は姿勢の悪い中年を、❸は粋がっている若者を、❹は初めて歩き出した子供を連想する。

また、波打ちながら歩いてみる。どの辺りで足が前に出るのか調べる。波打ちながら歩く動きを徐々に小さくしていくと、普段歩いている姿の延長だということが分かる。波の運動は、人の歩く姿の動きを分析したものだということが分かる。

②**開花**とは、字の通り、花ビラが開いたり閉じたりする動きを指す。

足の踵をくっ付けて立つ。両手を身体から四五度上空に開く。手の指をそれぞれに開放し、開いた状態に保つ。そのまま息を腹いっぱい吸う。これを❶とする。

次に、吐く勢いを利用して両手を閉じていき、胸の前で交差し閉じ切る。この動きと同時に、膝を曲げながら、上体を両膝の間に入れ込むように踵を上げてしゃがみこむ。あたかも曲がった両膝の間に閉じ切った上半身をしまい込むかのようにしゃがむ。これを❷とする。

この動きは上半身と下半身が同時に始まり、同時に終わらなければならない。高度なバランス感覚を必要とする動きだ。

この動きで学ばなければならないことは、呼吸を動きで表現することだ。呼吸の長さや、

吐く勢い、吸う勢いに比例した動きでなければならない。自分の息遣いに従って動かなければならない。動きに呼吸を合わせるのではなく、呼吸に動きを合わせることが大切である。

③腕のシンコペーションとは、下半身と上半身を固定し、左右の腕を肩から別々に動かす運動である。まず両手をぶら下げた状態から始める。右手の肘を軸に、肘から下の腕を体に沿って胸の前に掌を顔に向けて持ち上げる。そのまま掌を顔の前から右耳の脇を通って頭の後ろに持ってくる。このとき、肘は曲げたまま、上腕は開いている。その後、肩と肘が十分に上がった状態で、肘を伸ばし頭の後ろを通って腕を頭上に伸ばし切る。そのまま遠心力を利用して、右側に振り落とす。それを繰り返す。左手はその対象の動きを、右手が頭の後ろに伸びきる時に左手の動きを始め、左手の動きは、常に右手の動きのワンテンポ後に続く。頭上から落ちる腕の振り子運動がシンコペーションのリズムを刻むので、腕のシンコペーションという。

④波のアクセントとは、①の**波**にアクセントを加える動きだ。膝、腰、胸、顎（頭）。アクセントのつけ方には二種類あり、膝だけにアクセントをつけて一回うねり通し、次に

腰にアクセントをつけてうねる。次は胸に、次は頭にとアクセントを付けて波立たせる。もう一種類は、一回のうねりで、膝、腰、胸、頭と四か所続けてアクセントをつける。

⑤**逆波**とは、まっすぐに立って、顔を天井に向け胸をそる。

上半身はそのままで、頭だけを返して自分の胸を見る。

そのままで、腰を前方に押しながら胸を落として腰を返す、同時に膝を緩め自分の腰を見る。

そのまま背中を丸め、頭から上半身を丸めるように降ろしていき、自分の曲がった両膝を見る。

その状態から、顎を先頭に上半身を前方へ床に平行に伸ばしていく。同時に膝を伸ばし上半身と下半身で九〇度の角度を作りバランスをとり、顎を出す。そこから背中を弓なりにしながら、顎を先頭に起き上がって天井を見る。それを繰り返す。

この動きにストーリーを付けてみる。

「空を飛んでいる鳥を見上げていたら、鳥の糞が額に落ちてきて、顔を伝って流れ落ち、胸、腹、腰まで流れ続け、両太腿を伝って足まで落ちるのを至近距離で確認し、音がするのでそのまま顔だけを上げると、さっきの鳥が目の前にいて『うわっ』と思った時に

は、鳥は飛び立ち、上半身を顔から起き上がらせて、再び空を見上げる。」
この逆波を繰り返しながら歩いてみる。どの時点で、どちらに足が出るか試す。
逆波の歩行とは、後ろへ後ずさりすることである。今流行の、ダンスの動きに応用されているのが分かる。

⑥**ボート漕ぎ**とは、脚を肩幅に開いて立つ。片足を一歩前に出す。両手は胸の前方に軽く差し出し、長い棒状の物（オール）を掴む。後ろ脚の踵は、決して床から放さない。
押すとき、オールを持つ手の位置を変えずに、手首を返し、掌を正面に向け、腰と首にアクセントを付けて一気に前へ突き出す。その体勢を維持したまま、前に出ている脚へ重心移動する。後ろ脚の踵は上げずに踏ん張る。
引くとき、オールを持つ手の位置を変えずに、手首を返し、手の甲を正面に向け、腰と首にアクセントを付けて一気に前へ突き出す。その体勢を維持したまま、後方の脚に重心移動する。

⑦**ターン**とは、脚を肩幅に広げて立ち、腰を落とす。
軸にする左足に重心を移動する。左膝に重心が掛かり曲がっている状態で、右足を浮か

せる。その上げた足を手前左側に巻き込むようにして左足軸で一回転する。頭の上下運動はしないように重心は下がったままで回る。反対側の足でも同様にする。
もし、一回転が難しい場合、九〇度、一八〇度、二七〇度と増やして練習する。
さらに、一回転以上、二回転、三回転と試してみる。
また、回りながら重心を下げて、胡坐をかいて座る。座ったところから逆回転して立ち上がる。

⑧**平行移動**とは、両足を肩幅以上に開いて、膝を曲げ、腰を落として立つ。両腕は太ももと平行に構えるところから始まる動きである。

❶息を吸いながら頭ごと右を見る。
❷息を止めて右足へ平行移動して体重を移す。
❸息を吐きながら下半身と首から上を動かさずに、上半身だけを頭と同じ方向を向くように動かす。

続いて、

❶息を吸いながら頭ごと左を見る。
❷息を止めて、左足へ平行移動して体重を移す。

❸息を吐きながら、上半身だけを頭と同じ方向を向くように動かす。
体の動きを頭部、胸部、下半身、と三つに分けて動かす。

⑨**九つの動き**とは、コメディア・デル・アルテの登場人物、アルレッキーノがハエに翻弄される動きから発案された動きだ。

足を肩幅より広く開き腰を落とす。手は太ももに平行に構える。

❶真下にハエが止まる。上半身を背中が床と平行になるように倒す。

❷ハエが右の足元に移動する。左足に重心を移して右の膝を伸ばし、体ごと右の爪先付近を見る。

❸ハエがその延長線の先に移動する。頭先行で右足に体重を移動し、ハエの場所を見る。このとき左足の位置は動かさず膝を伸ばす。頭から左足まで背中側の直線を作る。

❹ハエは左上空に飛ぶ。重心は変えずに体ごとハエの方向を向き、頭から左足まで胸側の直線を作る。

❺ハエは真上を通って右上空に飛ぶ。❹とシンメトリックの形になる。左足に体重移動し、右足から頭まで胸側の直線を作る。

❻ハエは左足先の延長線上に止まる。頭から右足まで背中側の直線を作る。❸とシンメ

トリックになる。

❼ハエは左足の爪先付近に止まる。重心を右足へ移動する。❷とシンメトリックになる。

❽ハエは体の真下に止まる。❶と同じように重心を真中へ戻し、上半身を背中が床と平行になるように倒す。

❾ハエを手で取って食べて満足する。上半身を起こしてお腹をなでる。

◇図 2-2　20 種の動きのデッサン　⑩〜⑯
筆者作成

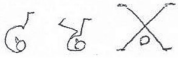
⑩不動点

⑪片足出し逆波

⑫重量挙げ

⑬17 の動き

⑭前転、片側前転、側転、逆立ち



⑮32 の動き

⑯円盤投げ

⑩**不動点**とは、左右の足を平行に肩幅に広げてまっすぐ立つ。
胸の前にカウンターのような板があると設定して、両肘を脇に着けて肘を曲げて両掌を置く。
その両手の位置を動かさずに、両肘を伸ばしながら真っ直ぐ下へしゃがむ。
手の位置は、絶対に変えずに立ったり、しゃがんだりする。
身体に不動点を見つける。

⑪**片足出し逆波**とは、逆波を片方の脚を前方に大きく出してバランスを取りながらする動きである。
顎が出るときに前方に出した足の膝を曲げ、体重を移動する。
天井を見ながら起き上がるときは両膝が伸び、胸を通過するときは後方の脚に体重が移動し、腰を見るために腰を返すと同時に、膝が曲がり、徐々に体重を前方の足へ移動させる。
これを繰り返す。
大きく頭で前後に車輪を描くように動かす。

⑫**重量挙げ**とは、両足を肩幅に開いて立ち、向う脛の外側の前方にバーベルの持ち手を想定する。両手でその棒を掴み、そこを不動点として、後ろに体重を掛けながら両膝を曲げて腰を上下する。この動きの三回目に、両手の肘を曲げながら上半身に沿って持ち上げ、棒が胸の上の位置になるように背中をのばしたまましゃがむ。踵は上がり、尻が踵の上に乗っている。そのままの状態で棒を維持しながら真直ぐに立ち上がる。一気に腕を上空に伸ばして、体をその真下に入れる。肩に重さを感じる。

⑬**一七の動き**とは、目の前に塀を設定して、それを乗り越える動きである。

❶見上げたまま膝を曲げて構える。
❷爪先立ちになり、腕を目いっぱい上に伸ばす。
❸両手首から先を曲げてその位置を固定する。
❹固定した両手の位置は変えずに踵を下すと両肩は上がる。
❺両手を固定したまま、踵を上げて登ろうと肘を曲げる。
❻そのまま手首と肘を曲げて胸の前まで下す。
❼右肩を両手で作った塀の上に乗せる。
❽左肩を乗せる。

❾両手を一緒に腰の位置まで下して上体を塀に乗せる。
❿左足の踵を下して右足を床から外し片足立ちになる。
⓫右足を両手と同じ位置に上げる。
⓬両手、右足を同時に床まで下す。
⓭左足と右手を放す。
⓮左足を左手と右足の延長線上に乗せる。
⓯手を放して塀の上から降りる準備。
⓰飛ぶ。
⓱着地。

⑭**前転、片側前転、側転、逆立ち**とは、主にアクロバットの授業で習う。

前転は、動きから動きの繋ぎとして使う場を探す。

片側前転は、柔道前転ともいい、前転より距離を伸ばすときに使う。

側転は、手と足の距離を同じに保てると移動距離も伸び、速さもスロー、クイックと自由自在に調整することが出来る。

逆立ちは、両手の上に肩、腰、脚を真っ直ぐに乗せて体を直立させる。どの動きも、力

任せにせず、体重を感じながらも軽くできるようになるまでバランスを探す。

⑮**三二の動き**とは、長い竿で水底の泥を掻き分けて進む船の船頭の動きである。川や沼などでこの方法が使われる。

❶下にある長い竿を見る。
❷かがむ。
❸右手を手前から、左手は向こう側から掴む。
❹立ち上がる。
❺右手を上に竿を高く掲げる。
❻右膝を曲げて重心を右に移す。
❼斜め下へ両手を下す。
❽左手を放して右手を下げる。
❾左手で竿の上を掴む。
❿正面に引きよせる。
⓫竿は不動点で重心を上げて立ち上がる。
⓬右を見る。

⓭左の膝を曲げて重心を左に移す。
⓮左手を放す。
⓯左手を竿の上に置く。
⓰肩を入れて右下へ押す。
⓱そのまま右に重心を移す。
⓲右手を放す。
⓳左手でその延長線に押し続け、肩を返す。
⓴左手の肘を伸ばし切るまで押す。
㉑右手を左手の上に置く。
㉒両肩を入れる。
㉓両肩で押す。
㉔右足に体重をかけて押し切る。
㉕手を放す。
㉖左手で竿のてっぺんを掴む。
㉗引き上げる。
㉘右手で竿の下を掴む。

㉙左手を放す。
㉚右手で上に引き上げる。
㉛左手で竿の下を掴む。
㉜❺に戻る。

⑯**円盤投げ**とは、その昔、ギリシャで行われていたオリンピック競技の一つ。
左手に円盤を、ＬＰレコードを持つように下から抱える。
左足に重心を掛け、円盤を持つ左手を振り子のように二回動かす。
三回目に、右足を後ろに移動させ、円盤を両手で振り子運動の延長先の頭上に持ち上げる。
重心は、後ろに移動した右足の上に移動する。
円盤を両手で前方に振り落とし、重心は右足のまま両足の間まで落とす。右手に円盤を持ち替え、右回りに一回り振り上げ、右足で飛び上がりながら空中で前方に投げる。
着地する。
この動きは現在の円盤投げとは別もので、ギリシャの壺に描かれた円盤投げをルコックの想像の下、古代の円盤投げをマイムとして創った動きである。

⑰**こん棒**とは、目の前の一本の棒を九〇度ずつ回す動きである。初めにこん棒を縦に設定する。

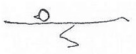
❶右手で上の方を掴もうとして掌を開く。
❷掴む。
❸左手で棒の下を掴もうとして掌を開く。
❹掴む。
❺棒の真中を軸に右に九〇度回す。

◇図 2-3　20 種の動きのデッサン　⑰〜⑳
筆者作成

⑰こん棒

⑱10 の動き

⑲平泳ぎ



⑳スケート

❶右手を放す。
❷手首を回して掴もうとする。
❸上から掴む。
❹左手を放す。
❺手首を回して下から掴もうとする。
❻掴む。
❼棒の真中を軸にして右に九〇度回す。

❶下の手を離す。
❷上に移動する。
❸上を持っている手の上を持とうとする。
❹持つ。
❺上を持っていた手を離す。
❻下へ移動する。
❼下を持とうとする。
❽持つ。
❾棒の真中を軸に右に九〇度回す。
これを繰り返す。

⑱**一〇の動き**とは、新しい物を見つけた時に、先に掴んでいたものを捨てる動き。
❶見る。
❷片方の脚を出して寄る。
❸手を出して掴もうとする。
❹掴む。

❶別の物を見る。
❷片方の脚を出して寄る。
❸手を出して掴もうとする。
❹掴む。
❺今、手に持っている物を見る。
❻それを捨てる。
❼新しく掴んでいる物を見る。
❽新しく掴んだ場所を不動点にして近寄る。
❾掴んだものを折る。
❿しっかり持つ。

❺掴んだ場所を不動点にして近寄る。
❻掴んだものを折る。
❼しっかり持つ。

⑲**平泳ぎ**とは、両足を揃えて膝を曲げて背中を床に平行を保ちながら行う動き。

❶息を止める。両膝を揃えて曲げ、背中を倒して、両手を胸の前で合わせる。

❷そのまま、右足を軸に左足を左側に浮かせる。

❸両手を進む方向に、手を合わせたまま肘を伸ばし、同時に左足を後方に浮かせたまま伸ばすと同時に息を吐く。

❹両腕を開いて頭を上げ、息を吸う。

❺❶に戻って繰り返す。

⑳**スケート**とは、両足を揃えて膝を軽く曲げ、後ろに手を組んで正面を見る。頭の位置を不動点とし、脚を左から斜め後方に蹴り、そのまま、元の位置に戻す。すぐさま右足を右後方へ蹴り、そのまま元の位置に戻す。

これを繰り返す。

次に、後ろに組んでいた腕を放し、前横と左右交互に振り、脚と合わせる。

右足で蹴るときに、右手が前に出て、左手は左横に振る。左足で蹴るときに、左手が前に出て、右手は右横に振る。

◆b　ルコックの運動分析学　第一学期

ルコックから毎回習う新しい動きは、どの動きを取っても人間の心理と連動していることが分かる。呼吸と動きの関連を技術的に教えるものだ。同じ動きでも息を吐く時と吸う時の動きの意味の違いを、実践を踏まえて理解する授業である。

月曜日の運動分析学の授業で、エドアルドが動きのお手本を示し、我々に正確に覚えさせる。それを同じ週の木曜日に、今度はルコックが動きの根拠を説明し、呼吸法によって意味が全く変化することを説明する。

また、単にルコックは教えるだけでなく、その応用を我々に授業で求める。ルコックの授業は習い、消化し、その後、共に探求し新しい発見をする実験の場だ。ルコックは何度でも言う。「今日は何を発見したか。毎日、新しい発見をしなければならない」と。

水の中を歩く（一〇月二三日）　洪水で水量がどんどん増えていくのがテーマである。

❶家から出ると道路が水浸しだ。

水浸しでない所を探して歩く。または、足が濡れないように静かに歩く。

❷水が増えて足首に達する。

足は水に浸かっているので、他の部分が濡れないように静かに、足を引きずるように歩く。歩きにくいので、腕を振り始める。

❸水は膝まで達する。

手にしぶきを受けたくないので、手を広げて歩く。膝を曲げて先ほどよりゆっくり歩く。

❹水が腰に達する。

腰まで水に浸かると水圧でなかなか前に進まない。手は胸の位置まで上がる。腰をひねりながらゆっくり歩く。

❺水は胸に達する。

手は頭の上に置き、顎を上げて爪先立ちになって歩いている。

❻水は首の位置に達する。

すると、歩くのは止めて泳ぎだす人、おぼれる人と別れる。

また、どの時点で声を発するかも想像してみる。

水の重みを無くさずに足首、膝、腰、胸、首と水位を上げていく過程は**波の運動**と同じである。

馬歩行、リズム（一〇月二九日）　メトロノームを使って歩く。

六二は普通の歩く速さ。六〇はやや遅い歩き。速さを変えると気持ちが変わることを認識する。

二人で並んで一緒に歩く。↓　同調している様子。

片方が裏打ちで歩く。↓　遅れていく方が、もう片方に同調できない様子。

また、裏打ちになったり、一緒に歩いたりと何度も切り替えてみる。

切り替わるときの気持ちの変化を考え、状況を見つけてみる。

重心移動、押す引く（一一月一九日）　ブリゲッラの動きを覚える。

踵を着けて立ち、軽く腰を下げる。両膝は曲がったまま、足をひし形にキープする。タオルを両腕に掛けるようにして両腕を広げ、右脇を曲げ、右膝を上げて右肘にぶつける。次に左脇を曲げ、左膝を上げて左肘にぶつける。これを左右繰り返し、徐々に動きを大きくして飛び跳ねながら繰り返す。この時、頭の位置を固定する。

次に、足を閉じて場所を固定し、頭も固定し、他の部分を前後左右に動かせるだけ動かしてみる。

今度は、そのまま腰を少し落として、頭だけを固定し、首から下を左右前後に他は動か

して限界を探す。二人で組んで、一人が頭を固定する。もう一人が動く。

二人で組んで相手を引いてみる。

❶引く側が強い場合

引く側が引かれる側の手首を片手で掴む。引いて歩く。引かれる側は負荷を掛ける。引く側は、頭を先頭に体を斜めにして引く。

❷引く側と引かれる側が同じくらいの場合

引く側は、引かれる側を向いて後ろ向きに歩く。二人でバランスを取りながら移動する。

❸引かれる側の方が強い場合

引く側は、両手で引かれる側の両腕を荷車を引くように掴み、身体は胸から先に出して、引っ張っているのか引っ張られているのか分からない、ほぼ動かない。動かせない。

二人で組んで相手を押してみる。

❶一人は身体を棒状にして、後ろに倒れる。もう一人はそれを後ろから受け取る。そのまま、押して歩く。押される側は、後ろに体重を掛けたまま押されながら歩く。

❷押す側は、自分の肩で手を添えながら押してみる。または、自分の背中で押してみる。

集団で押してみる。六人対一人。

一人の棒状の者の周りを囲み、押して、向かい側の人に渡す。最初は近い距離で始める。慣れたら距離を少しずつ離して、棒状の者を落とさないように相手に渡す。

七つのテンション（一一月二六日）　体の筋肉の張りを七段階に分けて演じる。

❶非常に疲れている状態。四つ足に倒れる。起き上がる。気落ちを声に出してみる。意味のない言葉やうめき声。

❷リラックスの状態。女子をナンパする若者。それに応えるミーハー娘。隙だらけの状態。アメリカ人の一種のイメージ。日本のカワイイ女の子たち。

❸無駄のない状態。歩く、座る、立つ、話をする、無駄な動きを一切せず行動する。機械的なビジネスマン。真面目な人。忙しい政治家。冷たい人。

❹感じやすく、繊細な状態、または興味津々。この状態から、出会いが始まったり、何かを発見したりする。芝居に必要な最低限の状態。

❺反応したらすぐ実行する状態。動きがきびきびしている。切れがいい。

❻反応が大きく、大げさになる状態。声も叫び声になる。ラテン民族の会話。
❼感情が最高に達した状態。動けなくなる。極度の緊張。恐怖。息が詰まった様子。

五七の動き（一二月三日）　**一七の動き**の前後に、誰かに追われて路地に入り込んで、塀を登り、向こう側へ降りたら、また見つかって走り出すまでをカウントしたもの。

先ず九歩、歩いてくる。
❿振り返る。
⓫追っ手を見つけたリアクション。
⓬行く手を見る。
⓭扉を見つける。
⓮扉へ向かう。
⓯右足。
⓰左足。
⓱右足。
⓲左足。
⓳扉に引っ付く。

⑳追っ手を見る。
㉑反対を見る。
㉒正面の塀を見る。
㉓右を見る。
㉔左を見る。
㉕㉖㉗㉘と四歩、歩いて、
㉙～㊾**一七の動き**（**二〇の動き**の⑬参照）。
㊿塀の向こう側に着地。
(51)立つ。
(52)左を見る。
(53)右を見る。
(54)追っ手を見つけるアクション。
(55)右を向く。
(56)走り出しのアクション。
(57)走り去る。

四元素（一二月七日）

粘土になる。

マイムで粘土を触る。↓　捏ねらない。作らない。硬さや温度を感じる。

自分の周りから粘土を採る。↓　右から、左から取り出し合体させる。それを地面に打ち付ける。

自分が粘土になる。↓　人から捏ねられる。

自分一人で捏ねられたことを再現する。

粘土の上を歩く。

木になる

地面に根が生えたかのように立つ。誰かが風になって木を揺らす。

移動して、自分の気に入った場所を選ぶ。そこに根を張る。身体を伸ばせるだけ伸ばす。

場所を次々と変え、繰り返す。

◆c　身体教育学

身体に決して負荷を掛けず、呼吸を使って関節と関節の間隔を離して、ゆっくりと筋肉をほぐしながら動いていくのがこの授業である。毎回、自分の身体に新しい動き方を教え、覚えさせていく。少しずつ自分の骨格を理解し、足の裏から頭のてっぺんまでの骨格を内側から感じられるよう感覚を目覚めさせる訓練である。殆どの時間はピラティスマットを使い、自分の身体を寝かせて、自分の各部位の重さを感じ取れるように、小さな動きを繰り返しながら、自分で自分の身体を知る授業だ。イスラエル人のモウシェ・フェルデンクラウス身体訓練法に倣い、ルコックの最も近くで長年協力して来た、初期の卒業生であるモニカ・パニュウが確立させた独特の方法論でもある。一九七九年まで教授した後、彼女は学校を去った。しかし、彼女から習った卒業生達が引き継いで教授している。

私たちの年は、サンドラ・ムラデノヴィッチがこの身体教育学を教授した。彼女は後に、即興テーマの教授になり、別の卒業生が身体教育学の教授になっている。こうして、生徒から生徒へと学校の教授法は引き継がれていく。

◆d　アクロバット

週に一度だけ、マット運動の時間がある。前転後転から始まり、柔道前転、側転、片手側転、倒立前転、飛び込み前転、ロンダート、前宙、バク転と高度になるほど、恐怖が伴う運動を少しずつ克服するよう続ける訓練である。また、三つ玉ジャグリングは、習得しなければならない課題のひとつでもある。

〔日常生活の再演〕　一週目〜四週目

第一学期の最初のテーマは「日常生活の中に見る無言劇」――これは、四週間のプログラムである。

私たちは毎日の生活の中で会話をしていない時間が意外に多い。例え大勢に囲まれている時でさえ、話さない時間が多い。朝、起きてから出かけるまで、電車の中、道を歩いている時、独りで買い物をしている時、独り喫茶店でお茶をしている時、周りに大勢人がい

たとしても滅多には話さない。そんな瞬間を再現するのだ。しかし、演技の初心者は、演じるということは自分を見せることだと誤解し、無理やり人に話しかけたりして、わざわざ特別な事をする。これが「下品」と評されるのだ。しかし、本来の自分の姿を素直に再現する事が素人にはどんなに難しいことか。直ぐ特別な存在になりたがる。自分をよく見せたいからである。この自分の本来の姿を再現する事が最初のテーマだ。一方では、世界中から集まって来る初対面同士の学生たちに最も相応しいテーマでもある。本当に言葉が通じない相手同士であるからしゃべれないし、しゃべったとしても、訛りが強くて理解できない。何もしなくても面白いのだ。

即興のテーマも自主授業のテーマも大筋は同じであるが、教授によって出す課題が違う。其々の教授の授業は尊重され、ルコックが校長だからと干渉することは、学生の前では絶対にない。だからこそ、其々の教授の出す課題は別々なのだ。しかし、全てのテーマの出所はルコックからなのだから、彼が全てを把握しコントロールしていることには変わらない。

◇表 2-2　ルコック国際演劇学校　一年生　第一学期　入学試験期間の時間割（1981-82）

筆者作成

	曜日	テーマ	9：00	10：00	11：00	12：00	13:00
第一週目	月10/12	日常生活の再演	自己紹介	波、開花 Edouardo	自主授業「ある場所に　ある事件が」		
	火10/13		歩く、走る、すれ違う、股関節	スイミングプール Edouardo		自主授業「ある場所に　ある事件が」	
	水10/14		自主授業「ある場所に　ある事件が」		逆立ち、3点倒立	初めての授業 Lassaad	
	木10/15		ポート、波 Lecoq	自主授業「ある場所に　ある事件が」		パーティ Lecoq	
	金10/16		腰、肩	カフェ Lecoq		自主授業「ある場所に　ある事件が」	
第二週目	月10/19		シンコペーション Edouardo	野次馬、ベンチ Lecoq		自主授業「ある場所に　ある事件が」	
	火10/20			自主授業「ある場所に　ある事件が」		スイミングプール Edouardo	
	水10/21		自主授業「ある場所に　ある事件が」		側転、逆立ち	初めての授業 Lassaad	
	木10/22		股関節、	自主授業「ある場所に　ある事件が」		第1回作品批評会「ある場所に　ある事件が」	
	金10/23		水の中を歩く Lecoq	子供部屋 Jacques Guedj		自主授業「非凡な家」	
第三週目	月10/26		逆波 Edouardo	子供部屋 Jacques Guedj		自主授業「非凡な家」	
	火10/27		波	格納庫 Edouardo		自主授業「非凡な家」	
	水10/28		自主授業「非凡な家」		倒立前転、倒立	初めての授業 Lassaad	
	木10/29		馬歩行、リズム Lecoq	自主授業「非凡な家」		第2回作品批評会「非凡な家」	
	金10/30		脊椎と骨盤	子供部屋 Jacques Guedj		自主授業「村」	
第四週目	月11/02		歩行と呼吸 Edouardo	6つの音階　Lecoq		自主授業「村」	
	火11/03		脊椎と骨盤	自主授業「村」		状況創作　Edouardo	
	水11/04		自主授業「村」		人の肩に立つ	待ち人来ず Lassaad	
	木11/05		波とバランス Lecoq	2年生中間発表鑑賞 「Bandemime」		自主授業「村」	
	金11/06		呼吸と柔軟	子供部屋 Jacques Guedj		自主授業「村」	
第五週目	月11/09	中性仮面	押す、引く、ポート Edouardo	目覚め Lecoq		自主授業「村」	
	火11/10		首	目覚め　Edouardo		自主授業「村」	
	水11/11		自主授業「村」		逆立ち	登場 Lassaad	
	木11/12		重心移動、押す引く Lecoq	自主授業「村」		第3回作品発表批評会「村」	
	金11/13		身体教育学	木、水、鳥 Jacques Guedj		自主授業「6つの音階」	

第六週目	月11/16	中性仮面	9の動き Edouardo	森、山、川 Lecoq	自主授業「6つの音階」
	火11/17		起きる、重心移動	季節 Edouardo	自主授業「6つの音階」
	水11/18		自主授業「6つの音階」	逆立ち	出遣う Lassaad
	木11/19		重心移動、押す引く Lecoq	2年生中間発表鑑賞 「Melodrame」	第4回作品発表批評「6つの音階」
	金11/20		股関節	海、平野、森、山 Jacques Guedj	自主授業「人間の要素」
第七週目	月11/23		9つのマイム、重量挙げ、ボート	山、川、平野、砂漠 Lecoq	ロンダード、側転、飛び込み
	火11/24		ねじる	四季 Edouardo	自主授業「人間の要素」
	水11/25		自主授業「人間の要素」		出遣う Lassaad
	木11/26		7つのテンション Lecoq	自主授業「人間の要素」	第5回作品発表批評会「人間の要素」
	金11/27		立つ	海、平野、森、山 Jacques Guedj	自主授業「巨人の目覚め」
第八週目	月11/30		重量挙げ、9と17のマイム Edouardo	森、火事、山 Lecoq	自主授業「巨人の目覚め」
	火12/01		上半身と呼吸	岩登り、崩壊 Edouardo	自主授業「巨人の目覚め」
	水12/02		自主授業「巨人の目覚め」	逆立ち	海からの誕生 Lassaad
	木12/03		57と17のマイム Lecoq	自主授業「巨人の目覚め」	第6回作品発表批評会「巨人の目覚め」
	金12/04		内側と外側	平野、突風、疾風、風 Jacques Guedj	自主授業「都市の横断」
第九週目	月12/07		9と17のマイム、重量挙げ Edouardo	四元素、木 Lecoq	自主授業「都市の横断」
	火12/08		Sandra	海、嵐、海 Edouardo	自主授業「都市の横断」
	水12/09		自主授業「都市の横断」	倒立前転	海、嵐、陸 Lassaad
	木12/10		57のマイム Lecoq	自主授業「都市の横断」	第7回作品発表批評会「都市の横断」
	金12/11		開校25周年記念展示会		
第十週目	月12/14		復習 Edouardo	四元素の出会い Edouardo	個人面接 Lecoq
	火12/15		マッサージ	火 Jacques Guedj	個人面接 Lecoq
	水12/16		個人面接 Lecoq	床運動	話し合い Lassaad
	木12/17		個人面接 Lecoq		
	金12/18		眼球マッサージ	四元素の出会い Jacques Guedj	個人面接 Lecoq

	Sandra	Cristophe		Lecoq		
運動分析学	身体教育学	アクロバット	即興	作品発表批評会	自主授業	2年生の中間発表

◆月曜日　ルコックの即興授業

ルコックは先ず、人と人がすれ違う瞬間を即興させた。知らない者同士がすれ違う。片方が急いでいる場合、走っている場合、もう片方はそれに反応するのかしないのか、繁華街では？　人通りの少ない裏通りでは？　村では？　野原では？　場所と状況によって反応の仕方が変わるということ。また、知り合いと偶然出会った場合、相手が親しい間柄か、見覚えのある程度か、思い出せない相手なのか、はたまた運命の相手なのか、反応の違いを即興させては、その反応がリアルだったかどうかを丁寧に説明する。演技が少しでも説明的だったり、意図的に笑いを呼ぶような演技をすると直ちに止める。まずはリアルなリアクションを探させるために、自分に正直な瞬間が生まれるように指導する。また、何がリアルなリアクションなのかを見て覚えさせるために、何度も状況を変えて試した。

「パーティ」（一〇月一五日）　五人一組で一人ずつ登場。突然受け取った招待状を携えて、素晴らしいお屋敷へ来てしまった。案内されたホールには大きなシャンデリア、絵画、美術品、ベランダから見える美しい庭、テーブルに用意されたオードブル、しかし、招待主がほぼ誰か分からない不安の中、同じように招待されて入場してきた初対面の人達をどの

ように見るか、またはどのようにそれぞれに応対するかを演じるのだ。一人でもリアクションを間違えると即刻止められ、メンバーを変えて新たに始める。また、二人目からの登場のタイミングを考えさせる。前の人と同じタイミングでは、繰り返しという退屈な間が生まれ始める。正しい間を見つけなければ即刻止められる。それぞれが正しい間で五人全員が登場出来た時には、お話は自然と出来てしまうのである。

「カフェ」（一〇月一六日）　一人の即興。馴染みのカフェでいつもと同じ時間に、いつもと同じ席でいつもと同じ飲み物を注文する。ところが何かがいつもと違う。そう、誰かが自分を見ている。誰だっけ？　思い出せない。もう少しよく見よう。えっ、好みだ。なら、堂々と見てみよう。素敵な方だ。あ、こちらに合図をしている。ならば、こちらからも合図を返そう。えっ、立ち上がってこちらに歩いてくる。自分に向かって来ると勘違いして、立ち上がって出迎えようとすると、通り過ぎられる。自分の後ろの人に合図を送っていたのだ。意外な結末に驚く自分、恥じる自分、どこかに隠れたくなる自分。

　相手を想像する時間と、そのリアクションの時間を演じることが出来るのか。最後まで演じることが出来るかできないか勝負だ。

「野次馬」（一〇月一九日） 九人一組の即興。一人ずつ登場。バスを待っている人たちが何かを一緒に見てリアクションをする。それぞれが別の目的で同じ場所に集まってくるタイミングと、誰かが最初に何かを見つけ、それに気づいた人のリアクションに気づいたリアクション、と続けることで、全員がそのリアクション、を共有できるようになる。そして、それが何だったのかが見えてくる。

「ベンチ」 三人一組、または五人一組の即興。ひとつしかないベンチに座ろうとして別の人に先に座られる。それをどのように奪い返すか。どのような状況がリアルであろうか。どのくらいの時間を要するか。どれもリアクションとアクションの稽古である。

「六つの音階」（一一月二日） 一人即興。仕事の動きを決める。同じことが繰り返される動きがよい。先生が太鼓で音を六度鳴らすので、その音にリアクションをする。

❶殆ど聞こえない。仕事には支障が全くない。

❷聞こえるが、手元の仕事にはまるで支障がない。

❸はっきり聞こえたので手が止まるが、なんでもなかったようなので、直ぐに仕事に戻り、仕事のリズムは回復する。

❹明らかに聞こえた。仕事の手は再び止まり、もう、気持ちは落ち着かないので、用心

しながら仕事に戻ろうとするが、以前とは別のリズムで仕事する。このとき、仕事のリズムを通常時の倍速の場合と倍遅くなる場合を試す。

❺もう、完璧に仕事は放棄してしまう。

❻逃げる。または笑う。または驚く。または泣く。または倒れる。

グループで即興。同じような仕事をしている者同士グループになり、場所を設定するグループでリアクションをする。

このテーマは一一月一四日第四回作品発表の自主授業の題材にもなった。

◆火曜日　エドアルドの即興授業

最初の即興テーマは、初日に動きを教えたポルトガル人、エドアルド・ガロによる**「スイミングプール」**（一〇月一三日、二〇日）。

五人一組で一人ずつ登場する即興だ。エドアルドは事細かに場所設定を説明する。「プールの入口のドアの取手を、右に四五度回しながら押して開けるが、温室プールのため、気圧の違いから閉める時は気を付けないと一気に閉まる。」と、いう具合に、あたかもそこに透き通ったドアがあるかのような完璧なマイムで、ドア、清涼飲料水の自動販売機、コ

インロッカー、更衣室、シャワー、飛び込み台のあるプールと説明する。子供の頃、公園の地面に石で線を書いておうちごっこをした時のように、いやそれ以上に細かい。一つの場所を全員で共有できるように、とても詳しく説明しながらお手本を示す。最初の登場人物が触った場所を次の登場人物が正確に真似て、残りの登場人物に伝えていく。ただマイムをするだけではない。初めてこのスイミングプールへ来た者なのか、常連客なのか、自分で決めた背景を持って登場しなければならない。そして、お互い初対面である。間違わないように細心の注意を払って、できるだけ同じ場所に同じものがあるかのようにマイムで場所を作り出しながら、スイミングプールへ来る人物を演ずるのだ。正確にマイムができる登場人物の数が増えれば増えるほど、自ら風景が見えてくる。お互いに相手が何をしているかを見失わなければ、マイムをしながらも、お互いのキャラクターが分かってくる。そして、五人全員が登場すると、そこで何か出来事が起きる。それがきっかけで誰かと会話が始まるかも知れないし、その場から帰ってしまうかもしれない。事前の打ち合わせなしで、誰がどんな勇気をもって話を展開できるか。自分の演技を持続しながら相手の演技を観察する練習である。そして、誰が経験者で、誰が初心者か一目で分かるテーマでもある。

スイミングプールの次は**「格納庫」**（一〇月二七日）。

これも五人一組。プロペラ機が入っている真っ暗な倉庫に泥棒三人とそれを追いかける警官が二人入ってくる。初めての場所に泥棒仲間という知り合いが三人、警官仲間という知り合いが二人、見えない場所で、手探りで倉庫の中を行き来する。登場人物五人が正確な位置づけを表現できるか、相手をどれだけ観察できるかによって、プロペラ機が見えてくるから面白い。また、倉庫内が暗くて相手が見えないことを演技することは、泥棒と警官が並んで歩くことさえできる。その様子は特別な演技をせずとも、見ている者からは滑稽に見えるのである。説明せずとも滑稽さは状況だけで生まれるのである。

◆水曜日　ラサードの即興授業

チュニジア人のラサード・サイディによる**「初めての授業」**（一〇月一四日、二一日、二八日）。

一人即興。新任教師として今日が最初の授業である。長年、教師となるために勉強してきた成果を、生徒等に披露しようと張り切って教室に入ってきて教壇に立つが、張り切りすぎて生徒が置いてけぼりの自分勝手な授業をしてしまう。やがて、自分の失敗に気付き、

自ら教室を去る。

好きな言語で喋ってよい即興である。登場は初々しい新任の態度で、徐々に自分の本来の姿に変身していくアクションを重視する課題である。どんな授業を選ぶのか、ある程度話せる内容を選ぶ方がよい。また、どのようにして、自分の失敗に気が付くのか、生徒によってか、自分自身であろうか、外部からの何かによって気付かされるのか、自由発想が要求される。序盤で、本音と建て前を時々交互に出せると面白くなる。後半は本音で突進する。そして、鼻先をへし折られる。

「待ち人来ず」（一一月四日） 一人即興。今日は、待ちに待った人が来る約束の日だ。呼び鈴が鳴る。ドアを開ける。「待ってました…！」全く別な人がいる。これを三度繰り返して、四度目に粗雑な態度で開けると、待っていた人が来る。三度訪ねてくる人の設定を考える。三度共、同じ人でもよいし、別の人でもよいが、四度目に怒りをぶつけそうな相手を想定してみる。

◆金曜日　ジャック・ゲッチの即興授業

フランス人のジャック・ゲッチ先生による「子供部屋」（一〇月二三日、二六日、三〇日、一一月六日）。

一人即興。人生経験を一通り終えた中年が、自分の幼少期の部屋を訪問したならば、どうリアクションするだろうか。懐かしい子供の頃の物に出会い、いつの間にか子供に返り、夢中で遊んでいる自分に気付き、もはや子供ではない自分に戻って部屋を去る。自分の部屋に入る瞬間をどう演じるか、子供部屋を想像し、見ることができるかが最初のポイントである。想像の部屋を正確に、中年として表現できるのか、そこから思い出の物と出会うことが出来るのかが二番目のポイント。そして、思い出の物からタイムスリップして子供に戻って遊べるのかが三番目のポイント。子供に戻って遊ぶ自分に、中年の自分が気付く瞬間、それに対する中年としてのリアクションが四番目のポイントである。大まかな筋書きは決まっているが、どのように時間を使うか、どのような場所か、何で遊ぶか、準備する必要がある即興だ。

基本、即興授業は先生が今日の課題を説明し、その説明を聞いて、やりたいと思った者

から前に出て即興する。先生が指名することは殆ど無い。また、数名が同時に立ちあがった場合でも、先生は誰かを選ばない。立ちあがった者同士で誰が演じるか決める。時には相手の気迫に負けて退く者や、ずっとにらめっこ状態になったりするが、先生は知らんぷりだ。だから、迷いのある時は簡単に退いてしまう。また、ずっと見るだけで時を過ごす者もたまにいる。そんな時も先生はほっとく。やりたいと感じる時が来るのを、本人も先生もじっと待つ。しかし、あんまり待たせると進級試験に間に合わなくなってしまうというわけだ。

自主授業　一週目〜六週目

自主授業の時間は、ルコックから口頭で説明されたテーマを、学生だけで稽古して完成させ発表する。学生は完全に放置され、教師は誰もがノータッチだ。例え誰か先生に質問したとしても、みんな口を合わせて「さぁ、君たちの思うようにやりなさい。」と答える。期日までに完成させた作品は、ルコックを始め、教師の前で上演され批評して貰える。唯

一この時間だけが、上級生や他のクラスの学生に見学が許されるのだ。それ以外の授業は決して見学を許されない。過去の卒業生が遠い国から来た場合、見学を許すことは、たまにある。特に、三年生の教育学を終えた卒業生には許すようである。

最初のテーマは**「ある場所に、ある事件が」**。グループに分かれて創作だ。

第一日目で、ついさっき自己紹介したばかりで、まだ運動分析学の授業しか受けていない状態で突然言われるのである。ほぼ初対面同士でグループを作らなければならない。発表は、二週間後だという。知らない者同士が集まれる場所の設定と、その後に起きる事件の起承転結を決めろということだ。それも言葉無しで。初めは同じ言語を話す者同士が集まる。英語圏の学生はすぐに集まって、グループができる。フランス語を話す学生は、命ぜられたわけではないが、世界中から集まってきている学生のグループ分けを担当し始め、あたかも国際会議の議長国のような役割をする。私のような、英語もフランス語も片言の学生がうろうろしているのを見ると、各グループの人数や様子を見て回って、どこかのグループに入れるよう調整してくれたりする。フランス人はみんな親切だ。私の最初のグループは七人で、フランス語で会話する学生が集まっていた。最初の一週間はただ時が過ぎ、何も決めずに過ぎてしまった。

二週間目にようやくテーマが決まり、地下鉄の列車がホームの手前で途中停車してしまい、それぞれがパニックになるという設定にした。その列車内で小便を漏らしてしまうのが私の役。二週間後の木曜の三限目が発表会で、発表が終わるとルコックはその場で批評を始める。ルコックが大きな声で「彼女は…だ。彼女は…だ。」とやたら私を例にしてみんなに説明していたが、内容はまるで理解できなかった。「下品、嘘」とルコックが言っていたと、親切なオランダ人に教えて貰ったのは、第二回目のテーマ「**非凡な家**」を新たなグループで、稽古し始めていた次の月曜であった。この大失敗に終わった最初の課題「ある場所に、ある事件が」は、知らない者同士が共存できる場所で、何かしらの事件が起きたことによって、そこに居合わせた人達のリアクションで関係性を生まれさせるのだが、先ず、失禁という下ネタを選んだ事が大きなマイナス点であり、その上、私の演技は公衆の面前で失禁してしまい、恥ずかしいと説明しただけの、リアリティからは程遠いものであったということだ。しかし、どのグループも突拍子もない事件ばかりを設定し、グループによっては途中で止められもする。「やめて！なにもない。空っぽ。全て嘘！」私たちの演技はリアルなリアクションがひとつも出来ていないことを知らされたのだ。

次の**「非凡な家」**は、テーマをどのように解釈するかによって、怪奇現象が起こる家、家族関係が異常な家、逆に、特別に素晴らしい家と、様々なアイディアが出た。前回でリアリティがないと酷評したにも関わらず、今度のルコックがくれたテーマは、もっと特別な設定を求めるものだった。発表まで一週間しかなかったが、動きの授業や即興の授業で、お互いの演技も見て慣れ始めてきた。第二回目の発表では、リアルなリアクションが生まれる瞬間が見えたグループを「悪くない」とルコックは褒めた。私のグループは五人で、朝食時に怪奇現象が起こる家を表現したのだが、テーマの解釈が幼稚なので叱られるかと思いきや、リアクションが劇的で良かったと褒められた。これは、ありえない状況でも、信じられるリアクションを生み出せということだろうか。私は前回の失敗があったので、とにかく汗をかきながら演じたことしか記憶にない。

三回目のテーマは、二週間掛けてクラス全員三四人で「村」の一日を表現しろという課題。フランスの田舎村の朝から寝静まるまでの一日を演じろというのだ。実際に村を全員で見学しに行ってもいいと言っていたのではないだろうか。フランス人の中から何人かが立候補して代表グループが出来、実際の村見学をしたらしい。あっという間に、村の見取り図と各家の家族構成のリストと時間の流れが記入されたコピー用紙三枚が全員に配られた。そして、その代表グループの中に、いつの間にか演出家がいて、稽古は彼が指示を出

していた。教会、学校、郵便局、役場、農家、鍛冶屋、肉屋、カフェ、パン屋。どんな音から始めるか、誰が一番早起きか、我々のマイムでも表現するが、決め手はそれぞれが出す音で、時間が過ぎていくのが分かるようになっていた。まだ暗いうちから聞こえる動物の鳴き声、パン屋のパンをこねる音、朝食のやかんの口から出る蒸気の音、学校の鐘、子供たちの合唱、教会に集まる年寄りたち、昼食の後の静けさ、その静けさを鍛冶屋の音が壊し、一斉に午後の仕事の音が始まる。やがて、学校終了の鐘、夕方の静けさの中の戯れの音、夕立、走り去る足音、一斉に始まる夕食、子供が寝て、カフェが閉店し、人々が寝静まり、動物の鳴き声に終わる。

最後まで悩んで作った夕立の表現は、全員で指を鳴らして表現した。今思い出しても美しい音色だった。ルコックは感動していた。私たちも感動していた。何もないホールで、子供が地面に線を引いて、ままごとをするような、そんな技術でお互いの行動を把握しながら、静けさを尊重した村の表現は本当に美しかった。こうして、私たちのクラスに最初の演出家が現れたのである。レジス・オバディア（Régis Obadia）、アルジェリア生まれのフランス人。この時期にコンテンポラリーダンスカンパニー「レスキス」（L'Esquisse）を立ち上げ、バニョレの振付コンクールで大賞を得たばかりであった。

四回目のテーマは、ルコックの即興授業で習った**「六つの音階」**を基準に、オリジナルな作品を一週間で作れというものだ。リアクションの大きさを六段階に分けて、徐々に大きくして、何にリアクションしているのか、六つ目で結末を見つける課題だ。

四つのグループが発表した。四人の囚人が監視人の合図によって肉体労働しているとき、六つ目の合図で囚人が監視人に反逆する話がひとつ。

アンサンブルの演奏が終わった後のカーテンコールで、お辞儀の回数を音階にし、四回目から客から何かしら物が飛んで来るのに全員が気づき、五回目で明らかに大きな物が投げ込まれ、六回目にはそれを逆に投げ返して逃げるという話の二グループがはっきり分かって面白かった。

出来たグループと出来なかったグループの差は、状況が見えるか見えないかであった。出来なかったグループは、リアクションの動きを単に大きくしただけのアクションでしかなく、状況が架空の場でありリアリティに欠けていた。また、最後の六つ目にひと捻りがないと、話の展開に驚きが無く、単なるパニック状態でしかなかった。

私たちAクラスと同じ時間に授業がある二年生のクラスは、時間が重なっていて普段の稽古を見学する事など全くできないのだが、どうやら二年生は、一般公開発表会に向けて

作品を作っているらしく、その途中経過を私たちに見せるという。ルコックは私たちの自主授業時間を一コマ潰して見学させた。映画をマイムでグループ創作した作品だった。午後のクラスの学生も一〇名以上見学に来ていた。Bandemime（フィルムマイムとでも訳したらよいだろうか）、映画を、口から出す音と身体の動きだけで表現したものだ。

私は二年生の身体能力に驚き、その発想力に圧倒された。映画のカメラワークをマイムで表現していて、全体が見渡せたかと思うと、顔のドアップがあったり、機械仕掛けの物を複数の人間の手で見せたかと思うと、等身大のラブシーンがあったり、我々一年生は全員度肝を抜かれた。その日の六作品中、既に二作品は完成していて、マイムの技術も素晴らしく、発想力と構成力は非の打ちどころがないものだった。

特に印象に残っている一つは、特殊な身体能力と美しい肢体の持ち主でカナダ人のフィオナ・ゴードン（Fiona Gordon）を中心に創作された映画『ターザン』で、彼女の蛇が登場して話が始まるのだが、その登場だけでジャングルでの話だということが分かったのだ。そして、グループ全員が、一人何役も演じること、演じるのは人間、動物、植物、物と、複数の役を演じながら話が進むのだ。もう一つは『007』シリーズのアクションシーンが映画さながらに展開され、ハンサムなジェームズ・ボンドが悪者たちに次から次へと追いかけてられていく様を、飛行機からのパラシュート脱出、スキー場で崖へ墜落、自動車事

故シーンへと、アップと引きを交互に繋げ、次から次へと演じ分けるスピードのあるスリリングな仕上がりで、悪役に徹していたイギリス人のサイモン・マックバーニー（Simon McBurney）がこの作品の演出を担当していることが、初めて見る私にも他のみんなにも一目瞭然であった。

この二年生の中間作品発表を見ることによって、我々の自主授業のレベルが上がるのは当然である。その日を境に一年生の意識は高まり、自主授業への取り組み方が一層真剣になる。物創りの可能性を目の当たりにしたからこそだ。その日、見学した一年生は皆二年生に進んで同じ事をしてみたいと思うのである。そう思わせる為に、ルコックは敢えて一年生に途中発表を見せたわけだ。全て彼の計算通りに学校は進むのである。

〔中性仮面〕　五週目〜一〇週目

第一学期の二つ目のテーマは「中性仮面」。五週間のプログラムだ。

この学校の代名詞といえる「中性仮面」の授業を受ける為に、多くの学生は遠くから入学しに来る。「中性仮面」は、ルコック学校の大事なテーマだ。フランスの「演劇の父」

といわれているジャック・コポーに師事されたジャン・ダステから受け継がれ、ジャック・ルコックで完成された「中性仮面」の世界を演じられるか演じられないか、想像出来るか出来ないか、無いものを見てそれに触れるという、技術であり技術でない身体表現の授業を受講しに来るのだ。また、世界でルコックだけが持っている、イタリアの仮面創作者アムレト・サルトリ作の中性仮面を着けることができることも理由のひとつである。ルコックがアムレトに提案し、注文して作ってもらったから、雛型を所有しているのはルコックなのだ。ルコックは学校を開校する前に、イタリアのミラノのピッコロ・テアトロ俳優養成学校で八年間、演出や振付を担当しながら、コメディア・デル・アルテの復元作業でアムレト・サルトリと出会い、共同で仮面作製をしている。この世界でルコックしか持っていない仮面で中性仮面の授業を受講するために、毎年世界中から一五〇人もの学生が集まってくるのだ。俳優としての感性を磨くために、創造するという領域に入り込む入口に立つためにだ。

中性仮面はその名の通り、男らしさも女らしさも無く、若くも年寄りでも無い。過去のない、未来を予測することもない、恐れを知らない、今この瞬間を生きる仮面である。すべての場所に初めて遭遇することを演じる仮面である。

課題が進むにつれて場面展開が増える。場面の切り替えをどのように演じられるか、ど

れくらい集中できるか、心を開放して演じることができるかに挑戦するのだ。人間としての原点を感じ取れる大きなチャンスでもあるのだ。

◆ルコックの即興授業

「目覚め」（一一月九日）　初めてこの世に目覚める。決して誕生するのではなく、初めてこの世を見る。床に寝ている体勢から目を開け、そのまま起き上がる。初めての場所にいることを表現する。それは呼吸だ。

「森と山と川」（一一月一六日）　後ろ向きに立っている。一息に振り返る。森の中にいる。森の奥深くへと入ると、突然森が切れて山が見える。山を登る。最初は平たんで、徐々に傾斜が付き、石や岩があらわになって、やっとてっぺんに到着する。すると下界が見える。山を下りると川があった。川を渡ると町が見えた。立ち尽くす。

「山、川、平野、砂漠」（一一月二三日）　振り向くと、山のてっぺんにいる。下界を見る。山を下りる。川の前にたどり着く。川は石をつたって渡る。平野の見える場所に出る。平

野を前進する。やがて平野は砂漠へと変化する。砂漠の真ん中に立ち尽くす。

「森、火事、山」（一一月三〇日）　森の中を歩く。奥深く入っていく。何かの音を聞く。音の方へ行く。音の方も近づいてくる。火だ。近寄る。熱い、逃げろ、走れ、飛べ、逃げろ。走れ。突然、森が切れて山が現れる。でかい山だ。驚き、立ち尽くす。

◆エドアルドの即興授業

「目覚め」（一一月一〇日）　何もない大地。草もない、ただ大地があり、そこに寝ている。力を抜き、何も考えず、ただ起き上がる。そして、前を見る、進む。立ち止まって呼吸する。ただ、驚く。

「季節」（一一月一七日）　森の中に立つ木。春、夏、秋、冬の中から一つの季節を感じ、演じる。

「四季」（一一月二四日）　森の中に立つ木。それぞれの季節の変わり目を積極的に表現する。

「岩登り　崩壊」（一二月一日） 物をつかんで登る。小石が落ちるのを見る。登り続ける。突然、崖崩れ。一緒に落ちる。転げ落ちる。転げ落ち続ける。やがて、動きのスピードが落ちて動かなくなるまで続ける。

＊動かなくなるのは、気絶するのではなく、土や石になるように止まる。

「海、嵐、海」（一二月八日） 海の中に寝ている。小さな揺れから波が起きて嵐になる。やがて嵐が収まっていき、再び静かになり、立ったまま静止する。

「四元素の出会い」（一二月一四日） 仮面を外して、火、水、土、木、空気と、それぞれの要素を体に取り入れて動く。出会う。話せるなら話す。

◆ラサードの即興授業

「登場」（一一月一一日） 後ろ向きに立って、一息で振り向き始める。海を見る。海の呼吸を感じる。感じながら前進する。足元に何かを見つけ、手に取ってそれを海に投げる。海に落ちる石をじっと見る。

「出遭う」（一一月一八日、一一月二五日） 両側に男女分かれて背を向けて立つ。二人同時に振り返る。お互いを見る。近寄る。止まる。近寄る。絶対に触らない。

「海からの誕生」（一二月二日） 海の中にいる。波の呼吸の変化を利用して波になり、波に乗って海から出る。

＊海のリズムを得るために、海に向かって歩く練習をした。

海岸から海を見ている。波の呼吸を捉えて、波と同化しながら海に入っていく。海になる。

「海、嵐、陸」（一二月九日） 海の底にいる。潮の流れに乗って上昇する。海上に近づくにつれて海のうねりが大きくなり、嵐になっている。嵐のうねりの中、荒れ狂い、やがて岸に打ち上げられ、砂浜に飛び出す。陸を見る。砂浜を歩き、陸にたどり着く。

◆ジャック・ゲッチの即興授業

「木、水、鳥」（一一月一三日） 寝ている状態から、目が覚めて起き上がる。木を見る。近寄り、触る。水の音に気が付く。水を見て、近づいて触る。鳥のさえずりを聞く。振り向くと鳥

がいる。近寄ると鳥が飛び立つ。それをじっと見る。

「海、平野、森、山」（一一月二〇日、二七日）　海の中から波になって、海岸に跳び出る。砂浜から平野を歩く。森に入る。森深く入ると突然、森が切れて山がある。山を見る。

「平原、突風、疾風、風」（一二月四日）　振り向くと、砂漠にいる。小さな風が吹き始め、あっという間に大風になり、やがて砂嵐になる。吹き飛ばされまいと重心を降ろして耐えているが、吹っ飛ぶ。飛ばされて風になり、やがて、風から空気へと変化し、空気として止まる。

「火」（一二月一五日）　具体的にどのような火なのか決め、その火の呼吸を見つける。徐々にその火のリズムを体に入れ、動きにし、大きくしていく。常に動きは変化し生きているかのように動く。火が消えるまでを演じる。

「四元素の出会い」（一二月一八日）　仮面を外して三人で出会う。一つの部屋に、それぞれが四元素のうちの一つを選んで三人で出会ってみる。通り過ぎるのではなく、相手を見て、相手が何を表現しているのかを見る。共に一緒に動いているうちに同化してみる。

自主授業　六週目〜一〇週目

五回目からは、即興授業が中性仮面に入るので、それに沿ったテーマが始まる。最初のテーマは「**人間の要素**」、次は「**巨人の目覚め**」、最後は「**都市横断**」。どのテーマも日常使われるしぐさや説明的な動きは使えない。

「**人間の要素**」（**一一月二六日**）をどのように解釈するかによって、元素の世界であったり、出産をイメージする動きだったり、それぞれのグループの発想力を見ることが出来る。具体的なストーリーなど説明する必要はないのだ。リズムと空間の使い方が問われた。

「**巨人の目覚め**」（**一二月二日**）は、目覚める巨人を表現するのか、それとも巨人が目覚めたことを見極める側を表現するのか。共にグループのメンバーがテーマを共有しているか、共有するイメージは明確かを見る。また、お互いの動きに敏感に反応できているか、動きのルールが見えるかも見る。動きのリズムで、静と動、速い遅いを、また、柔らかいと硬い等、呼吸を中心に、動きにして表現してみる。コロスまたは集団で動く場合と個人で動

く場合の切り替えなど、距離感をお互いがタイミングを感じながら演じることによって、空間の使い方を徐々に覚えるのだ。

「都市横断」（一二月一〇日）は、無機質な動きを利用して、都会の街中を移動する動きを集団で作るものだ。マンハッタンのような街並みや、東京のような街並みを歩く姿だけで、町の構造が見えてくるのが面白い。歩くリズムは、大自然を歩くのとはまるで別世界のものだ。

自主授業で作られる作品は、必ず五人以上九人以下のグループで作らなければならない。二人では敵か味方かしかできず、三人では三角関係、四人では二対二に二手に分かれるのがお決まり。しかし、五人いると初めて複雑な関係性が見え始める。六人も上手く分かれてしまうのでつまらない。八人も同じこと。七人と九人なら良しとする。一〇人以上は誰かが演出家にならなければ収拾がつかない。ルコックは、五人以上九人以下と毎回繰り返した。そして必ず、新しい人と組め、そして、一緒に演じる人を選び、見極めろと繰り返した。みんなが誰と演じたがり、誰を避けるのかを見たいのだ。

また、ルコックは偶数が嫌いで、奇数でなければ毎回難癖を付けた。「あ〜、やっぱり偶数だったからうまくいかないね。話が単純でつまらない…」「三人？　空間が埋まらな

いじゃないか。寂しすぎる。」「ほら、六人だから空間が割れるだけで平凡。」口を尖がらせる。「ダイナミックな空間の使い方を探しなさい。」「やり過ぎ。」「品が無い。」「下品。」「説明的。」「何がなんだか、まるでポタージュ（手当たり次第になんでも入れてミキサーにかけたもので、一つ一つの食材の味が不明の意）そのもの。」見せの途中で、彼の口元がモソモソし始め、着ているタートルネックを口元まで伸ばし始めると、学生は皆その様子をキャッチして、そわそわして来る。「平坦。」「だめだ。」「よくない。」「やめて！」「ストップ！」「ちがう！」が出る。でも、その後の説教が長かった場合は、まだ見込みありなのだが、短い場合は最悪だ。まして怒り心頭で言葉が出なくなる時は、腹立ちを隠すために、その学生の存在を消したかのように振る舞う。次に良い演技をするまで無視するのだ。その反対に、頬骨が上がり、目がいたずらっ子のようにキラキラしてくると「悪くない。」「良い。」「凄くいい。」「素晴らしい！」最高の褒め言葉は「崇高な演技だった。」何度も聞ける言葉ではないが、良かったときは正直に褒める。言われた本人は天にも昇る状態になり、それから一週間は有頂天だ。中には、一年前に言われた褒め言葉を繰り返す輩も出てくる。

ルコックは大抵、冷静に見たそのものを言葉で描写する。彼は正直だから見た通りの評価をそのまま口にする。だからこそ、我々学生にも正直であることを望み、正直な誠意あ

る演技を要求するのだ。不誠実な演技は見つけ次第、直ちに止めに入る。非情なくらい。無駄な時間は取らせないのだ。

自主授業で創作された作品の成果は、即興や動きの授業で得る個人の技量以上の結果が求められた。即興の授業では、教師からその場で出された課題を即座に理解出来ずとも、他の人の演技とその評を見ながら（聞きながら）答えを見い出す事が出来る。再チャレンジのチャンスもある。時には偶然もあるし、まぐれもある。しかし、自主授業の発表は別だ。事前に打ち合わせた稽古を踏まえての発表だから、どのくらい考え込まれたか、どのくらい稽古したものか一目瞭然だ。批評は当然、容赦がない。同じ学生が二週続けて酷い出来だと容赦なく言われる。五人のグループの場合、誰か一人が目立つと「他はどうした、独り芝居だ。」と言われる。一人だけ目立たない者がいると「彼は何をしているのか。」とグループ全員が叱られる。五人のそれぞれの役割が見えることを要求される。自分の演技だけでなく、他人との関係を演技として見せられるか、また、前回と同じ失敗を繰り返していないか、新しい発見はあるか、自分にとってより良いメンバーを探し出せるか、また、妥協や同情でグループが編成されていないか、繰り返し言われる言葉から、ルコックが選ばずとも学生自ら同じ船に乗るメンバーを、自主授業の回を重ねる毎に選んでいく仕組みに出来ている。そして学期末に、あの二階の校長室にいるルコックとの個人面談で、「あ

なたがもし続けたいのであれば続けられますよ。どうしますか。」と言われたら入学試験に合格なのだ。

最初の四週間の即興の授業では、私の素朴な表現や正直な演技が良く褒められた。あまりにも教師の説明の言葉が解らず、同級生の言葉も解らず、動物的に視覚、聴覚、触覚を鋭くせざるを得なくなり、あきらめの境地から心が解放されたのだと思う。または、見栄という感覚を失ってしまったという方が正しいのかも知れない。気が付くと、人から良く見られたいという意識から解放されていた。楽だった。特に「村」の自主授業発表が終わったすぐに、みんなから質問攻めにあった。私の年齢が入学条件である二一歳以上に満たないのではないかと。小学生にも見えるとか、本当の年齢を言えと疑う二年生もいた。私の演技も私の容姿も、完全に子供として存在していたらしい。単に夢中だっただけなのに。

中性仮面の授業は日本でも受けていたが、言葉が分かっていた日本では、この仮面で何を感じたらよいのか、何を演じたら良いのか正直分からなかった。演じている途中、何も見えないので、見える振りをしている自分に嫌気がさし、演ずることを止めてしまった記憶もある。

ところが、ルコックの小稽古場で行われる中性仮面の即興テーマの背景は、演じている

間に、本当に見えてくるのである。それも魔法でもなんでもなく、演者と一緒に想像し始めるのだ。先生たちの今日のテーマの説明が耳に入ってきたとたん、やりたいと即座に思う。その瞬間、誰よりも先に思った者が、すっと立ち上がり前に出て即興を始める。すると、その演ずる動く身体が、私たちに状況背景を見せてくれるのだ。そして、それが見えている自分にも驚くのである。人の即興に感動すると、今度は自分の時も集中度が増す。稽古場にいるのに、同時に大自然の中にいる感覚を持つのだ。稽古場の熱気が一気に上がるのを肌で感じる。学生同士がお互いに影響し、刺激し合いながら、次々と昨日出来なかったことが今日出来るようになる。そんな理想的な授業が毎日繰り広げられるのである。これが世界に知られる、ルコックの中性仮面のマジックなのだ。

水の重みを感じて、うねり、火の呼吸を生きる。空気の張りつめた呼吸で軽く静止し、土の湿り気に溶け込む。今まで経験したことがない、様々な体の状態を感じ取れる、実にユニークな授業なのだ。私は中性仮面で自然を、特に大地を感じ、人間の原点を感じ得た。また、この数週間で人の身体の動く仕組みに、各関節に、骨に、初めて関心を持ち、身体の内側から筋肉の連なりを、足底から頭のてっぺんまで、雷に打たれたように感じることが出来た。フランス語が分からないまま、先生の説明も批評も言葉としては何も理解しないままに、匂いと目と音で、ありったけの感性を逆なでしながら受け続けた授業であり、

至福の時間でもあった。

二年生のシネマイムの中間発表を見たその二週間後に、今度はMelodrame（メロドラマ）の中間発表を見せられた。二年生の中間発表を見るのは二度目でもあり、午後のクラスの一年生は前回よりも沢山見学に来ていた。作品は五作品あり、真面目に演じているのだが、信じられない話の展開に大笑いする作品が続出した。先ず、外国人の話すフランス語の訛りが滑稽過ぎる。真剣な話の展開の中、外国訛りで誰かが話すと、私たち観客はドッと笑い出す。それまで作っていた言葉のリズムが崩れるからだ。しかし、そんな中に一つの作品だけ心にぐっとくる作品があった。英語を話す人種だけを集めたグループだ。

舞台はアメリカの南北戦争中、娘と若者は結婚したいと思っていた。しかし、娘の父親はもう一人の別の金持ちの男を娘の婿にと考えていた。ある日、二人に召集令状が来て二人とも戦争へ旅立ってしまう。やがて若者は戦死し、父の勧めた男は帰って来る。娘はその男と結婚する。しかし、男は娘が死んだ若者を未だ思い続け、自分は愛されていないことに腹を立て、アル中になり暴力を振るうようになる。その結果、それを見かねた父親は娘をかばって、娘の夫である男と揉み合い殺されてしまう。娘はそれを見て男を銃で殺す。父親は今わの際で自分が間違っていたと娘に許しを請い、死ぬ。途方に暮れている娘の前

に、死んだと思われた若者が、目を患って包帯をして帰って来る。目の見えない若者を前にして、娘は驚きと喜びと絶望を感じ、喜んでいる若者に、実は、自分は別の男と結婚をし、子供にも恵まれて幸せに暮らしていると嘘をつく。若者はその言葉に酷く傷つくが、自分が戦争から帰ってこられたのは君への思いからだと、こうして生きていられるのも君のおかげだと礼を言って去っていく。娘は子供と死のうとするが、赤ん坊の泣き声に我に返り泣き崩れ、話は終わる。

一見、ほかのグループと同じように笑いが起きる展開なのかと思われたのだが、演技の真剣さと間の取り方の上手さや悪役の上手さで真剣な流れを作っていた。最後の場面で、包帯の若者が去る前に、娘に向けて話す言葉は、最初こそ恨みも言ったが、彼女のためを思う愛情がふつふつとしていて胸を打つものであり、涙するレベルに達していた。このグループもSimon Mcburnyが演出を担当していた。

一二月一三日の日曜日まで開校二五周年のお祝いがあり、一二月一一日の金曜日は、その準備で学校は休校日だった。その日の午後、卒業生のグループで、メキシコからベルギーへ拠点を移すためにヨーロッパへ帰って来た劇団の芝居を観劇した。舞台には本物のアヒルが登場するのだが、そのアヒルの存在感に役者たち五人の演技が完全に負けてし

まっていた。ルコックは、アヒルしか見えなかったと感想を言い、怒っていた。

土曜日と日曜日は、学校の歴史の写真が展示された。最初に使用されたクラウンの赤い鼻、今の学校に移転するまで転々とした稽古場、今の学校の場所が、元はボクシング競技会場だったこと、若かりしルコックの写真、私にルコックを紹介してくれた岩浅豊明のクラウンの鼻を着けた写真、サンドラの学生時代の写真、エドアルドと、二年生の担当のセルジュ・マルタン（現在はスイスで自身の名前の学校を経営している）二人の学生時代の写真、モニカ・パニュウの学生時代の写真、テレビスタジオで中性仮面を演じている写真や、ルコックが演出指示を出している写真などが展示されていた。沢山の卒業生が訪問していた。

入学試験結果

第一学期も終わるクリスマス前のルコックとの個人面談で、第二学期に残れると告げられた時も、言葉より声のトーンと顔の表情で残れるのだと理解した。「貴女が望むなら学校を続けられます。貴女はとても良い。トレビアン！」

この後に続く第二学期からの様々なテーマや訓練がどのようなものか、このときは全く知らないまま、単に続けられる喜びと褒められた喜びだけを感じていた。

第三章　一年生　第二学期

第二学期のクラス編成

私のように欧米外から来ている学生は、休み中、帰国して家族と喜びを分かち合える予算があるはずもなく、独り、パリのクリスマスを過ごすのである。パリのクリスマスは一際美しい。特に夜が美しい。いたるところの街路樹が電飾され華やかになる。その華やかさが逆に独りを強調させるのだ。不合格であったなら今頃、国の家族とお正月を過ごせたのにと悲観するくらい、楽しくない二週間弱の冬休みを挟んで、第二学期は幸いにも直ぐに始まる。

一年生は、一クラス三五人強が四クラスもあったのに、一クラス減って三クラスになっている。せっかく顔見知りになって親切にしてくれたフランス語圏の何人かが消えていた。また、朝通学するのが辛いと午後のクラスに変更した学生もいた。その代わりに夜のクラスの何人かが入っている。夜のDクラスが無くなったのだ。四〇人を超す大所帯に様変わりしたこのクラスで、年度末の進級試験に向け、この先、自分は続けられるだろうかと正直自信は無かった。あらためて気合いを入れ直す。評価は相変わらずグループワークで創作された短編が中心で、上手く出来た時は一週間楽しく過ごし、失敗した時は辛い一週間

を過ごすのだ。即興の授業で個人的に評価して貰ったとしても、グループワークで活かされなければ評価に繋がらない。教師たちは、誰が誰と波長が合うかを観察しているが、グループ編成には何の助言も無く、己で知れと言う。「誰と組むかよく吟味して選びなさい。」と新しくグループを編成する度にうるさく言う。時には「いつも同じ者と組むな。」とも言う。まるで、「才能の無い奴とは組むな。仲良しとは組むな。」と言っているかのように聞こえる。

この頃になると、即興の授業は、次のグループワークのテーマの道標となる授業である事が分かって来る。動きの授業も毎週のテーマに繋がっているのだ。すべての授業はルコックの下、繋がっているわけだ。

ルコックの運動分析学　第二学期

第二学期の運動分析学で学ぶことは、一方では〔**二〇種の動き**〕を習得し続け、もう一方では、各テーマを即興するための基礎となる動きを、ルコックは丁寧に説明する。ル

コックの運動は、全て腰の動きから出発している。歩く行為は、それを全て物語っている。物を押すときも、手が先行しているのではなく、腰が先行している事実を把握しなければならない。また、物を引っ張る場合でも腰から体は動いている。人間のすべての動きは、腰から発信され、即ち、腕も足も動きの出発地点は腰である。〔**二〇種の動き**〕を習う上で、このことが身を以って分かったのが、ターンのバリエーションを教えてもらっていた時だ。身体の中心を掴むことによって、動きのバランスが取れるようになる。また、身体の中心である腰を出発地点として動くことによって、動きが限りなく広がることを、身を以って学んだのだ。

物質（一月七日） いろんな物質になる。

○ボール　…　人で立って、誰かに動かされているかのように動いてみる。二人で組になって、片方は、ゴム玉のように体を丸めてしゃがみもう片方は、そのゴム玉で毬つきをしてみる。または、三人で組んで二人で交互に一つのゴム玉をつく。

○バネ　…　二人で組になって、片方が体を真っ直ぐに伸ばし、バネに見立てる。もう片方は、バネになった体を押す。動かされた時の反り返りを正確に演じる。または一人でバネになり歩いてみる。

○プディング　…　二人で組んで、片方がプディングになり、もう片方は、その体を押してみる。プディングとバネの反応の違いをかめる。一人でプディングとして歩く。

○粘土　…　三人で組になって、一人を床に寝せる。その身体を二人で少しずつ動かす。少しずつ動かし、座らせたり、立たせたり、持ち上げて移動させたりする。人で人に動かされているように動いてみる。

○オイル　…　三人で組になって、瓶の中にいるかのように立つ。瓶を混ぜるときのように動かされる（動きは腰が中心）。瓶の中から出されるのをイメージしながら、口から出るときの動きを表現する。瓶の中の空気を押し出す勢いで一気に口から飛び出し、床に落ちてから広がっていく速度を感じながら完全に動きが止まるまでを表現する。

実物の動きを観察してみる。適当に想像で演じない。

物質の動き（一月一四日）　物質の動きを演じる。実際のスポンジ、コピー用紙、新聞紙、セロファン紙、紙袋、スーパーのプラスチック袋、風船、輪ゴム、板ゴム、定規を動かして本物の動きを見る。

○スポンジ　…　小さく潰したときから、元に戻るときの動きを再現してみる。

○紙　…　ぐしゃぐしゃにした後から、もとに戻る力と時間を演じる。スポンジのように元の姿には戻れない悲しさ、辛さが残る。

○風船　…　息を入れられ膨らむ様子から、息が抜ける動きとスピードを演じる。また、膨らんで自ら破裂する場合と、針で破裂させられる場合との違いを演じる。

物質の動きを観察し、それぞれの動きの質の違いを見つけ、再現すると、劇的要素をそこに見つけることが出来る。

「持つ」と「投げる」（一月二一日）「持つ」という言葉から受ける動きを探す。

同じ言語を話す者同士グループになる。

国別、地方別、出身校別に言葉からくるイメージの違いを知る。その言葉が子音で終わるのか、母音で終わるのかによって、出る動きの違いを見る。また、同じ言葉に複数の意味が含まれている場合は、選択によって、全く別の印象を与える。言葉を選び間違うと誤解されることが、この場で証明される。

＊私が「持つ」と上から引き寄せるように表現したことを見て、〔縦書き〕を連想した事をルコックは私より先に見破った。

「投げる」も同じように動きを探す。この言葉は、殆どが投げる動きそのものを表現す

ることになる。言葉自体に動きがあるからだ。

「一二の動き」（二月一日） 土を掘る。

シャベルを右手で取手を持ち、左手で柄を持つ。

❶右側に振る。
❷土に刺す。
❸右足に体重を移し
❹左足をシャベルに乗せる。
❺足と両手を同時に下げる。
❻左足を外す。
❼右手を下げてテコの要領で土を掘る。
❽シャベルが両手平行になるまで持ち上げる。
❾投げる方角を見る。
❿腕をその反対側に振って
⓫土を放る。
⓬左手で柄を持っている場所まで、右手が滑る。

「三年生のマイム教育実習」（二月四日）

この日は、三年生が創作した独自のマイムに番号をつけて、我々が一時間以内に習得できるかを試す日である。

イギリス人のノーマンのマイム

「自分の店へ、朝来て、カギを外してシャッターを開け、ドアを開け、中に入って閉めようとしたとき、店の中に人の気配を感じて振り返ると、すぐに両手を上げ、そのまま人が出ていくのを目だけで見送る。」

フランス人のエマニュエルのマイム

「自動車（オープンカー）のエンジンを二回かけたがかからない。車から降りて、車の窓に手を掛け二回押してみる。中に戻ってギアを変えて、もう一度車から降りて押してみるとエンジンがかかる。後ろに回って一押しすると、車が走り出してしまい、あわてて追いかけ、追いつき飛び乗り、ハンドルを掴んだときに、目の前の木にぶつかる。」

この年（一九八一～八三年）には、教育課程を学ぶ三年生が二人いた。彼らはいずれも

卒業生であり、一年間、ルコックの一年生過程の授業を、全て見学する権利がある。勿論、自主授業の発表時には、批評を言う権利も与えられる。彼らはひたすらルコック本人の授業を見て学ぶだけではあるが、即興の授業では、時々ルコックの指示で、即興の中に登場してきたりする助手のような役割もする。三年生という学年は、希望者があれば、という大学院のような位置にあり、三年生が毎年いるわけではない。この三年生を終えた者の中から、ルコックは学校の新しい教授を選んできている。また、教育課程である三年生を終えた者の中には、自分の国で新しい演劇学校の開校準備をしている者もいる。彼らは、未来の教育者志望たちなのである。

「各動物の特徴」（二月一一日）

○馬　…　足並みを真似る。下半身を馬の足並みのまま、上半身を騎手に見立てる。

○鹿　…　両手を広げ、角に見立てる。胸を張り牡鹿のように、足並みを馬より軽く運ぶ。

○鶏　…　足の運びを真似る。腕は、背中の後ろへ曲げて畳み込むように隠す。首を前後に動かしながら、首の動かし方を真似て、呼吸を見つける。呼吸と共に喉を鳴らす。足並みと呼吸が同じにならないように気を付ける。

○カメレオン　…　他人に分からないような呼吸法で、不動の時間とスローモーション

で動く時間と瞬発的に動く瞬間の、三種類のリズムを見つける。

○犬　…　舌を出し、継続する呼吸法を見つける。寝ているときも、待っているときも同じ呼吸法を持続し続ける。呼吸を止める時はどんな時か、また元に戻るのはどんな時か。主人が帰って来た時、興奮している時、怒って吠える時、喜んで吠える時、シチュエーションを決めて演じてみる。

○ネズミ　…　音を立てずに細かい足並みで移動する。小さく小刻みな呼吸、手の細かい震えのような動きを見つける。何かに注意を引かれた時の不動の時間と、再び動き出す瞬間は、ほかの動物とどこが、どのように違うかを見つける。

○鷹　…　両手を広げて飛ぶ。片足になって、その場で飛ぶ。旋回したり、低くなったり、上昇したり、舞い降りてみる。翼を閉じる。二・三歩、歩いてみる。同じ位置で再び飛び立つ。

○牛　…　前足になる両手を内側に曲げて胸の下に入れ、腰を片方に倒して寝る。起き上がってみる。必ず後ろ脚から起き上がる。立つ。一定の安定した呼吸を見つける。

「芋虫・三種の波の動き」（二月一八日）

○側面波　…　波の動きを体の脇で表現する。両足を揃えて、体を正面に向けたまま両

膝を曲げる。正面を向いたまま、頭から右側に倒れて続ける。次に右の脇を縮め、右足に体重移動する。そのままの状態で頭を左に倒し、左の脇を縮め始める。左へ体重移動する。再び右へ頭を倒して繰り返す。

足を肩幅に開いて、同じように動いてみる。

○芋虫　…　腹這いになり波の動きをする。両手は肩の脇に掌を床に固定して肘を立てる。

❶爪先を床に着けて、膝から足首にかけてできた空間を意識する。

❷爪先の位置を不動点にし、足の甲から膝までを床に着け、尻を上げた　状態で、膝から胸までの空間を意識する。

❸掌に体重を移しながら腰を返し、腹筋を使いながら背中を猫背にして、　顎を引いて前頭部までの空間を意識する。

❹腹を床に着けると同時に顎を突き出して腹這いになる。❶に戻り繰り　返す。この時、掌は前進する。

○背面波　…　仰向けに寝て、波の動きをする。掌は腰の位置より上に、床に肘を曲げて用意する。

❶膝を曲げて足の裏を床に着ける。

❷そのまま腰を持ち上げ、肩で立つ。
❸掌に体重を移動し、お尻をついて顎を上げ、上半身をうねりながら❶に戻る。その時に掌の位置を脇の下の方向へ移動する。

「まき割りのマイム」（三月四日）

まき割り台に切株を載せる。
それに斧を振りかざす。
切株に落とされた斧ごと持ち上げて、もう一度振り落とす。
斧はまき割台に刺さったまま、その斧をテコの要領で台から外す。
二つに割れ落ちた切り株を一つ拾い上げ、まき割台に立てる。
次は、一振りで二つに割る。
斧はまき割台に刺さったまま、四分の一に割れた薪を二つ拾って、脇に寄せる。
再び、斧をテコの要領で台から外す。
残りの二分の一の薪をまき割台に立てる。
一振りで二つに割る。
斧はまき割台に刺さったまま、四分の一に割れた薪を二つ拾って、脇に寄せる。

再び、斧をテコの要領で台から外す。
＊以上を淡々と繰り返す。

「シェーカーのマイム」（三月一一日）

シェーカーを左手に持ち、右手で蓋を三回まわして開ける。
蓋をそばに置く。
リキュールの瓶を取り上げ、シェーカーに入れる。
瓶をもとに戻す。
シェーカーを置く。
次に卵を取り、割り、両手で白身を捨てて、黄身だけの入った殻を右手に持ち、左手でシェーカーを持つ。
黄身を入れる。
殻は捨てる。
シェーカーの蓋を右手で取り、三回まわして閉める。
両手で振る。
三回まわして蓋を開ける。

蓋をそばに置いて、グラスを取り出し、それに中身を入れる。
飲み干す。
空のグラスをカウンターに置く。

「船を出すマイム」（三月一八日、二四日）

左を見る。
左へ三歩、歩く。
繋いである綱を三回まわしてほどく。
その綱を三・四回引っ張る。
初めは重く、だんだんと軽くなる。
桟橋に平行にヨットを着ける。
持っている縄をヨットの中に投げ入れ、ヨットの真中から中に乗る。
下を見る。
長い棒を手にして桟橋に押し当て、二度押す。次に、棒を持ち直して水の中に入れて四度押し、棒を引き上げ、ヨットの中の元あった場所に戻す。
前方を見て、振り向き、マストのリボンをほどく。

帆を張るため三・四回ロープを上から下へ引っ張る。
だんだんと重くなる。
ロープを固定する。
帆の風下へ移動し、左手で帆の端を持ち、右手で舵棒を持つ。
風がくる方法を見極めて舵棒を動かし進む。
風を感じる。
立ち上がり、ロープを外し、帆を降ろす。
船の真中から網を取り出し、海へ投げ入れる。
網を引く。
三・四回かけて、徐々に重く。
最後に網を引き揚げた時に、中から塊を取り出す。それを海へ捨てる。
次に自分のシャツを脱ぎ、ベルトを外してズボンを脱ぎ、海へ飛び込む。潜る。
海面へ浮く。
泳ぐ。
船に乗る。
寝る。

◇表３　ルコック国際演劇学校　一年生　第二学期の時間割（1981-82）

筆者作成

	曜日	テーマ	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00
第一週目	月1/4	要素と質	引く・押す Edouardo	物質 Lecoq		ハンドスプリング	
	火1/5		股関節	物質ーゴム・バネ Edouardo		自主授業「物質と要素の出会い」	
	水1/6		自主授業「物質と要素の出会い」			色 Lassaad	
	木1/7		物質ーLecoq	自主授業「物質と要素の出会い」			
	金1/8		股関節	自然の明かり Jacques Guedj		自主授業「物質と要素の出会い」	
第二週目	月1/11		Edouardo	物質 Lecoq		自主授業「物質と要素の出会い」	
	火1/12		股関節	自主授業「物質と要素の出会い」		物質の変化ー熱を加える Edouardo	
	水1/13		自主授業「物質と要素の出会い」		ハンドスプリング	七色の帯 Lassaad	
	木1/14		物質の動き Lecoq	自主授業「物質と要素の出会い」		第8回作品批評会「物質と要素の出会い」	
	金1/15		体の直線を探す	人工の明かり Jacques Guedj		自主授業「画家」	
第三週目	月1/18	詩と絵画	32の動き Edouardo	詩ー風 Lecoq		自主授業「画家」	
	火1/19		肩甲骨	詩ー風 Edouardo		自主授業「画家」	
	水1/20		自主授業「画家」		飛び込み前転	詩ー言葉 Lassaad	
	木1/21		「持つ」と「投げる」Lecoq	自主授業「画家」			
	金1/22		脊椎と骨盤	詩 Jacques Guedj		自主授業「画家」	
第四週目	月1/25		32の動き・7の動き・9の動き Edouardo	詩 Lecoq		飛び込み前転	
	火1/26		脊椎と骨盤	自主授業「画家」		詩 Edouardo	
	水1/27		自主授業「画家」		組み体操、肩に乗る	言葉の動き Lassaad	
	木1/28		円盤投げ Lecoq	自主授業「画家」		第9回作品批評会「画家」	
	金1/29		脊髄の柔軟体操	詩 Jacques Guedj		自主授業「詩人」	
第五週目	月2/1	動物	12の動き Edouardo	動物 Lecoq		自主授業「詩人」	
	火2/2		二人でバランス	昆虫 Edouardo		自主授業「詩人」	
	水2/3		自主授業「詩人」			家畜 Lassaad	
	木2/4		3年生のマイムの教育実習			第10回作品批評会「詩人」	
	金2/5		二人でバランス	爬虫類 Jacques Guedj		自主授業「57の動きのレビュー」	

第六週目	月2/8	動物	十字回し Edouardo	猿と猛獣 Lecoq	片手側転
	火2/9		腹筋の柔軟	魚 Edouardo	自主授業「57の動きのレビュー」
	水2/10		自主授業「57の動きのレビュー」		家畜 Lassaad
	木2/11		各動物の特徴 Lecoq	自主授業「57の動きのレビュー」	第11回作品批評会「57の動きのレビュー」
	金2/12		腹筋の柔軟	猛獣 Jacques Guedj	自主授業「動物から人間へ」
第七週目	月2/15	動物から人へ	10の動き Edouardo	動物から人へ Lecoq	自主授業「動物から人間へ」
	火2/16		手と足のマッサージ	動物から人へ Edouardo	自主授業「動物から人間へ」
	水2/17		自主授業「動物から人間へ」		動物から人へ Lassaad
	木2/18		芋虫、3種の波の動き Lecoq	自主授「動物から人間へ」	第12回作品批評会「動物から人間へ」
	金2/19		首と肩のマッサージ	動物から人へ Jacques Guedj	自主授業「キャラクター」
第八週目	月2/22	キャラクター	キャラクターで体操 Edouardo	最初の人物 Lecoq	キャラクターでアクロバット
	火2/23		キャラクターで受講	最初の人物で出会い Edouardo	自主授業「キャラクター」
	水2/24		自主授業「キャラクター」		最初の人物で自己紹介 Lassaad
	木2/25		歩き方、怒り方、笑い方 Lecoq	自主授業「キャラクター」	第13回作品批評会「キャラクター」
	金2/26		動きと呼吸	最初の人物Jacques Guedj	自主授業「反キャラクター」
第九週目	月3/1		反キャラクター Edouardo	2人目で出会い Jacques Guedj	自主授業「反キャラクター」
	火3/2		反キャラクターで自己紹介	反キャラクターで出会い Edouardo	自主授業「反キャラクター」
	水3/3		自主授業「反キャラクター」		2人目でパーティ Lassaad
	木3/4		まき割のマイム	自主授業「反キャラクター」	第14回作品批評会「反キャラクター」
	金3/5		動きと呼吸	ひとり二役Jacques Guedj	自主授業「一人二役」
第十週目	月3/8		Edouardo	2人目 Lecoq	自主授業「一人二役」
	火3/9		動きと呼吸	ひとり二役 Edouardo	自主授業「一人二役」
	水3/10		自主授業「一人二役」		Lassaad
	木3/11		シェーカーのマイム Lecoq	自主授業「一人二役」	第15回作品批評会「一人二役」
	金3/12		起き上がる	キャラクターの変貌 Jacques Guedj	自主授業「キャラクターの変貌」

第十一週目	月3/15	キャラクター	キャラクターの変貌 Edouardo	キャラ クターの変貌 Lecoq	自主授業「キャラ クターの変貌」
	火3/16		体の螺旋	キャラ クターの変貌 Edouardo	自主授業「キャラ クターの変貌」
	水3/17		自主授業「キャラ クターの変貌」		Lassaad
	木3/18		船を出すマイム Lecoq	自主授業「キャラ クターの変貌」	第16回作品批評会「キャラ クターの変貌」
	金3/19		体の螺旋	自作仮面 Jacques Guedj	自主授業「自作仮面」
第十二週目	月3/22	仮面	Edouardo	自作仮面 Lecoq	自主授業「自作仮面」
	火3/23		体重移動	自作仮面 Edouardo	自主授「自作仮面」
	水3/24		自主授業「自作仮面」		自作仮面 Lassaad
	木3/25		ヨットを 出す動き Lecoq	自主授業「自作仮面」	第17回作品批評会「自作仮面」
	金3/26		体重移動	Jacques Guedj	

〔要素と質〕　一週目〜二週目

◆月曜日　ルコックの即興授業

物質（一月四日）　一人即興

紙、ゴム、バネ、容器に入った油と蜂蜜等、実物を動かして観察する。

紙は、一瞬にしてぐちゃぐちゃにし、それを床に置いて、紙自身が元に戻ろうとする動きのリズムを見る。

輪ゴムを引っ張る。引きちぎれるまで引っ張る。引きちぎれる瞬間の動きを見る。

螺旋状のバネを上から押す。手を離したときの跳ね返る動きを見る。他の物質との違いを認識する。

油は、容器に入っている状態を見る。揺らす。容器からこぼしてみる。

蜂蜜も同じように揺らす。容器からこぼしてみる。同じアクションに対してリアクションの違いを物質の違いという。

どれか一つだけ選んで動きで再現する。

物質（一月一一日）　一人即興

風船を観察する。

風船を膨らます。指で掴んでいる風船の口を一気に放す。

水素ガス入り風船の上昇する動きを見る。紐をつけて固定したときに振動や風に揺れる動きを見る。

風船を膨らまし続け、破裂させる。

一つの物質に、アクションの種類の数ほどリアクションの種類があることを覚える。

どれか一つだけ選んで再現する。

◆火曜日　エドアルドの即興授業

物質―ゴム、バネ（一月五日）　一人即興

反動のある物質、ゴムとバネの種類を具体的に想定して、一つを選択し、三人のグループで演じてみる。物質に圧力をかける時と、開放する時の動きの違いを表現する。

物質の変化（一月一二日）　一人即興

物質に熱を加える様子を演じる。

蝋燭が燃えていく様子や、バターが軟らかく溶けていく様子、鉄板が焼けていく様子等、一つを選択して再現する。

◆水曜日　ラサードの即興授業

色（一月六日）　大勢で

色紙の色を見て、実際に動きを探す。色の濃淡、明暗、光沢から動きを想像する。各色に共通認識を持つよう話し合う。

【例】　赤は短い時間で強く大きな動き（火、血などを連想）。

青は静かなゆっくりとした呼吸で空間を支配する動き（空、海を連想）。

七色の帯（一月一三日）　一人で、または二人で

七色を並べる。

紫―藍―青―緑―黄―橙―赤

並べられた順に動きながら移動する。竹竿を色と色の境目に置いて色の距離を決める。実際の写真から虹の配色の幅を見て、色の長さを決める。

二人で組になり、一人は演じ、もう一人は導き、動かし、各色にいる時間を調整する。

◆木曜日　ジャック・ゲッチの即興授業

自然の明かり（一月八日）　一人即興

月、太陽、星、稲妻、虹、木漏れ日、流れ星等、自然界の明かりとして考えられるものを一つ選んで表現する。

人工の明かり（一月一五日）　一人即興

マッチ、蝋燭の火、蛍光灯、白熱灯、ダイナマイト、花火、パトランプ、ランプ、燈台、ネオン、ガス灯等、人工の明かりを表現する。

自主授業　一週目〜二週目

物質と要素の出会い（一月一四日発表）

二週間で制作。このテーマでは、物質を正確に表現することが最も重要である。物が人間のように動くのであり、決して人間が物のように動くのではない。ストーリーは探さない方がよい。科学実験のように、物質と物質が出会うと、反発する場合、融合する場合があるように、物質に忠実にリアルな反応を表現する。

○ダンスホール（六人）…　ゴム、糊、石鹸、木、鉄、油が社交ダンスを踊る。誰と誰は踊れるが、誰が踊れないかだけを見せた。

○家族喧嘩（六人）…　火のような母、空気のような父、鉄のような祖母、油・ゴム・バネのような子供たち。父が動くと母が興奮しだす。子供たちは次々と母にひれ伏しそうになるが、父親の元に集まる。祖母はしばらくじっと耐えていたが、最後には燃え上がる。

＊真剣に演じれば演じるほど、どんな物質かが分かってくる面白さを理解する。

〔詩と絵画〕三週目〜四週目

◆月曜日　ルコックの即興授業

詩―風（一月一八日）　一人即興、もしくはグループ即興

シェイクスピアの『リア王』からの抜粋された文章を渡され、次に原文で英語を話す者に読ませる。読み手は、詩から受ける印象が伝わるようにリズムに気を付けて読む。聞き手はその音から受ける動きを見つける。

＊読み手が上手いと内容が分からなくても、納得のいく動きが生まれる。

詩（一月二五日）　一人即興

フランスの詩人エドワード・グリサンの『賛美』を渡され、次にフランス語を話す者に読ませる。その聞いた音とリズムから動きを見つける。

◆火曜日　エドアルドの即興課題

詩―風（一月一九日）　一人即興

前日の、ルコックの課題で読んだ詩を音として聞く。リズムや流れを理解し、動きで表現する。

詩（一月二六日）　一人即興

詩を声に出して読む。または声に出して読んでもらい、それを耳で聞いて動いてみる。詩の音の流れを聞き取る。

◆水曜日　ラサードの課題

詩―言葉（一月二〇日）　全員で

思いついた言葉を発しながら動きで表現してみる。言葉のエネルギーを探す。

言葉の動き（一月二七日）　全員で

各自が選んだ言葉の動きを一人ずつ表現する。考えずに動いてみる。間をあけずに、次から次へと言葉を発してみる。

◆金曜日　ジャック・ゲッチの課題

詩（一月二三日）　一人即興

画家で詩人のアンリ・ミショーの『風』を渡され、その詩を自分で読んで、音からくるリズムを見つける。

詩（一月二九日）　一人即興

先週の詩を耳から聞いて、音のリズムを表現してみる。

自主授業　三週目〜四週目

画家（一月二一日、二八日）　一週間目に中間発表させ、それを踏まえて二週間で創作。画

家を選んで、表現するを選択する。どの作品を選ぶか、作品の何を表現するべきかを選ぶ。パロディは作品を安易に説明するだけなのでしない。

○パウル・クレー（七人）　…　複数の線と点を、七人各自が役割分担を決め、同時に動いて一枚の絵を表現した。一枚目から二枚目へは、続きの動きのように各自がそれぞれに動きを変化させ、三枚目は、突然、全員が同じタッチの動きをして、群舞のようにして三枚の絵を表現した。

○ワシリー・カンディンスキー（九人）　…　艶やかさ、華やかさ、力、色、リズム、色と色とのぶつかり合いを色ごとにグループに分かれ、別の色と混じったり、戻ったり、組み合わせを変えて複雑に表現していた。

○フィンセント・ヴァン・ゴッホ（九人）　…　丁寧な力強いタッチを九人全員の掌で絵の中のオブジェを一個ずつ表して一枚の絵を表現した。

＊この三つのグループは、マイムとも舞踊とも違う、動く絵画に見えた。

特に、ポール・クレーのグループの評価が高く、学年末に卒業生も交えて作品祭を開くため、そこで発表して欲しいので覚えておくようにと言ったくらいだ。

詩人（二月四日）　画家を表現したのと同じように詩人を選び、その作品の中から一つの

詩を選ぶ。詩の流れを動きとリズムで表す。

○アントナン・アルトー（四人）　…　女子が一人真中でリズムを刻み、その周りを男子三人が囲み、バラバラなリズムを刻んで、狂気的な動きをしていた。

○ジェームズ・ジョイス（三人）　…　相手から受けた動きをテニスのように受け返し、三人で調和を取りながら動いていた。

○パブロ・ネルーダ（九人）　…　郡衆の動きを言葉のリズムに合わせて動き、時には麦の穂のように見せたりした。

＊この辺りから、自分の好きな作品を選ぶ行為から、グループが大人数と少人数に分かれ始める。特に詩は、こだわりを持ったグループが、少人数でも理解し合える人だけを集めて創作するグループが生まれた。ルコックは勿論、少人数グループを非難したが、作品の出来に関してはそれとは別に評価をした。

おわりに

「何十年振りかに知人と出会うと必ず『今は何してるの？』と聞かれる。『学校に決まってるだろ！』意気揚々と答える私に、彼は少し呆れたような目をして『まだ教えているの？』『もちろん毎日、生徒がいる限りはね。』

というわけで、帰り道に自問してみた。そういえば、もう随分と長い間教え続けているけれど、毎年同じ事を繰り返し教えている感じがしないのはどうしてだろうか。開校当時と変わらず、毎年楽しいのだ。そりゃそうだ、動きの見識を更に深めようと私に欲を出させるのは学生が一緒だからだ。新しいジャンルを次から次へと発見したり、空想から現実までの人生を見つめ直させたり、作り出したりしているのも、学生が一緒だからだ。毎年異なる学生からの返答を得て、毎年異なる年代の学生の道案内で、学生と交流を持ちながらの《孤独》という旅を、私は毎年しているのだ…。」

ルコックは一九九六年一二月四日付で、開校四〇周年記念として、このように始まる六ページにわたる手紙を卒業生全員へ送っている。亡くなる三年前の事である。

学校の記録は、自分の記憶に留めるだけで正直書きたくなかったのだが、卒業して三三年の月日が過ぎた学校時代を、忘れてしまう前に書き残そうと思ったことが一番の理由だ。今回、書き進めているうちに、今まで、学生に教えていたことの中に間違いを見つけたり、また、なるほど、だから今まで学生に上手く伝わらなかったのかと、記憶から抜けていた箇所も数か所出てきた。当たり前のことだが、私のメモは私の記憶以上に正確だった。それが分かっただけでも大きな収穫だ。そして、もう一つ、よくもまぁ、これだけ毎日メモしていたものだと自分自身に感心した。ルコックは、授業中にメモを取ったり、録音したり、写真撮影を全面禁止していたのだから。

もう少しの時間、私は、このルコック演劇教育法の勉強を続けるつもりだ。今度は本書を有効に使いながら、もう少しましな授業をしたいと思う。

今回、本書を書く上で誰に一番感謝しなければならないのかと思った時、それは、やはり師、ジャック・ルコックだ。今はルコック夫人も亡くなり、長女のパスカル・ルコックが校長になっている。学校はすこぶる健在で、優秀な卒業生を毎年輩出している。卒業生が学校を守っているのである。

私の人生で「学ぶ」という言葉を体感したのが、パリのジャック・ルコック国際演劇学校

での二年間だったということで締め括りたい。次は、モニカ・パニュウの身体教育学のメモが残っているのだが、全部忘れる前に、活字に出来るかどうかは分からない。

参考文献

École International de Théâtre Jacques Lecoq ,*École internationale de théâtre Jacques Lecoq 1956-2006* ,
(DHC/ART fondation pour l'art conntemporain , ideal productions, 2006)

■著者紹介

盛　加代子　（もり　かよこ）

青森県生まれ。
桐朋学園大学短期大学部芸術科演劇専攻 12 期。
1983 年、ジャック・ルコック国際演劇学校卒業。
ベルギーを拠点に俳優、劇作、演出及び演劇教育者として 20 年間ヨーロッパで活動。
【受賞歴】
1987 年度 SIGNAAL 賞（フランドル最優秀作品賞）。1996 年 HUY 市賞（フランコフォン、ユイ演劇祭、ユイ市賞）。
2002 年から日本大学芸術学部演劇学科、桐朋学園芸術短期大学演劇専攻、埼玉総合芸術高校舞台芸術科の非常勤講師を経て、2005 年近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授となり現在に至る。

身体から発見する演劇
ジャック・ルコック国際演劇学校 1981–83

2016 年 10 月 10 日　第 1 刷発行

著　者　盛　加代子　　© Kayoko Mori, 2016
発行者　池上　淳
発行所　株式会社　翔 雲 社
〒 620-0831　京都府福知山市岩崎 54
TEL　0773-27-9824（代）　　FAX　0773-27-9340
URL　http://www.shounsha.com　　E-mail　info@shounsha.com
発売元　株式会社　星 雲 社
〒 112–0005　東京都文京区水道 1–3–30
TEL　03–3868–3275　　FAX　03–3868–6588
ISBN　978-4-434-22491-1
印刷・製本　青史堂印刷

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは
法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となります。

Printed in Japan